中国大学生第二届“走近日企、感受日本”
访日代表团总结报告

第２回中国大学生＜走近日企・感受日本＞
訪日団報告書

2007 年 11 月－12 月

中国日本商会

中国日本友好協会

第 2 回中国大学生＜走近日企・感受日本＞訪日団第二陣訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって.....1
中国日本商会社会貢献事業【走近日企･感受日本】寄付金申込社(者)一覧.....2
中国日本商会役員名簿.....3
2007 年度社会貢献委員会委員名簿.....4
2007 年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿.....5
袁敏道団長挨拶.....6
主催、共催団体の概要.....7
中国大学生《走近日企･感受日本》訪日団　団員名簿.....8
第２回訪日　ホームステイ受け入れリスト.....9
中国大学生第 2 次訪日団視察日程.....10
第 2 回中国大学生《走近日企･感受日本》訪日団視察先出席者リスト.....11
＜訪日記録＞
オムロン京都太陽工場（11/27）/担当：北京大学.....15
トヨタ自動車工場視察＆トヨタ会館（11/28）/担当：北京工業大学.....18
資生堂鎌倉工場（11/29）/担当 :北京航空航天大学.....22
新日本石油根岸製油所（11/29）/担当 :北京郵電大学.....25
NEC ブロードバンドソリューションセンター（11/29）/担当：南開大学.....29
住友商事東京本社（11/29）/担当：北京大学.....32
みずほコーポレート銀行東京本店（11/30）/担当：北京工業大学.....36
野菜くらぶ（群馬県）（12/3）/担当：北京航空航天大学.....39
ANA 機体メンテナンスセンター（12/4）/担当：北京郵電大学.....42
早稲田大学（12/4）/担当 :南開大学.....44
学生たちの感想文から.....49
学生たちの撮った写真.....66

第２回中国大学生「走近日企・感受日本」
訪日団報告書の刊行にあたって

本書は、「走近日企・感受日本」事業の第２回訪日団の報告書です。

「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会が２００７年から始めた中国人大学生を日本視察に招聘する社会貢献事業です。未来の中国を担う若い世代に日本及び日本企業を知ってもらうことを目的に、中国日本商会の総意で実施が決議され、会員有志企業の寄付金によって費用を賄っています。

第１回訪日については２００７年５月から６月にかけて実施され、人民日報に記事が掲載されるなど、各方面から高く評価されました。

第２回訪日団は、北京大学、北京工業大学、北京郵電大学、北京航空航天大学、天津の南開大学の５大学の学生３０人が参加しました。

一行は１１月２６日に北京空港を出発、１２月５日までの１０日間、日本に滞在しました。視察先は企業では、オムロン太陽工場（京都）、トヨタ自動車工場・トヨタ会館（愛知）、資生堂鎌倉工場（神奈川）、新日本石油根岸製油所（神奈川）、NEC ブロードバンドソリューションセンター（東京）、住友商事東京本社（東京）、みずほコーポレート銀行東京本店（東京）、ANA 機体メンテナンスセンター（東京）の８社。その他、農村見学として㈱野菜クラブ（群馬）、大学生との交流として早稲田大学を訪問しています。さらに、一泊二日でホームステイ体験も組み込まれております。ホームステイには３０家庭が協力いたしました。ホームステイ受け入れに協力した企業は１７企業（アルプス電気、伊藤忠商事、キヤノン、資生堂、新日本製鉄、住友商事、全日空、トヨタ自動車、日本航空、日立化成工業、松下電器、マルチメディア振興センター、丸紅、みずほ、三井物産、三菱商事、三菱東京 UFJ 銀行）にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、寄付各社のボランティア的な協力によって実施されております。また、共催団体である中国日本友好協会はじめ中国側にも全面的な協力をいただいておりますし、訪日団の日本受け入れ、本報告書の編集にあたっては、財団法人日中経済協会にご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理については、中国側では中国友好和平発展基金会に、日本側では財団法人貿易研修センターにご協力をいただいております。

改めて、本事業実施にご協力、ご尽力いただいた皆様に御礼申し上げるとともに、今後とも関係機関との連携し、本事業を実施していくことをお約束したいと思います。また、訪日団に参加した学生のレポートを中心とする本報告書により、日本商会の社会貢献活動の一端についてご理解いただければ幸甚に存じます。

中国日本商会　会長　北川　信夫

２００８年３月

（2007．7．1）

中国日本商会社会貢献事業【走近日企・感受日本】寄付金申込社(者)一覧

〔寄付金額〕1,000万円

1	朝日ビール株式会社
2	伊藤忠商事株式会社
3	キヤノン(中国)有限公司
4	新日本製鐵株式会社
5	住友商事株式会社
6	全日本空輸株式会社
7	トヨタ自動車株式会社
8	NEC(中国)有限公司
9	株式会社日本航空インターナショナル
10	株式会社日立製作所
11	丸紅株式会社
12	株式会社みずほコーポレート銀行
13	三井物産株式会社
14	三菱商事株式会社
15	株式会社三菱東京UFJ銀行

〔寄付金額〕500万円～1,000万円未満

16	株式会社イトーヨーカ堂
17	ソニー(中国)有限公司
18	豊田通商株式会社
19	三井住友銀行

〔寄付金額〕100万円～500万円未満

20	旭化成株式会社
21	味の素株式会社
22	アルプス(中国)有限公司
23	岩谷産業株式会社
24	オムロン(中国)有限公司
25	新日本石油株式会社
26	JFE鋼鉄株式会社
27	大和証券SMBC株式会社
28	株式会社電通
29	東芝(中国)有限公司
30	日産(中国)投資有限公司
31	オークマ株式会社
32	株式会社商船三井
33	株式会社JTB
34	日本たばこ産業株式会社
35	日本農林中央金庫有限公司
36	日本郵船株式会社
37	野村ホールディングス株式会社
38	松下電器産業株式会社
39	三菱化学株式会社
40	三菱電機株式会社
41	ワコール(中国)時装有限公司

〔寄付金額〕10万円～100万円未満

42	株式会社IHI
43	あいおい損害保険株式会社
44	アルパイン(中国)有限公司
45	インテック国際科学技術有限公司
46	川崎汽船株式会社
47	キッコーマン株式会社
48	協和発酵工業株式会社
49	株式会社組合貿易
50	KDDI 株式会社
51	五洲大氣社工程有限公司
52	J-POWER電源開発株式会社
53	JVC(中国)投資有限公司
54	住金物産株式会社
55	住友化学株式会社
56	住友電気工業株式会社
57	積水化学工業株式会社(京都研究所)
58	双日株式会社
59	太平洋セメント株式会社
60	宝酒造株式会社
61	株式会社竹中工務店
62	大日本印刷株式会社
63	大福自動輸送機(天津)有限公司
64	長富宮中心有限責任公司
65	帝人株式会社
66	株式会社東京機械製作所
67	東工コーセン株式会社
68	東レ株式会社
69	トヨタモーターファイナンスチャイナ
70	株式会社日新
71	株式会社損害保険ジャパン
72	日本財団法人国際通信経済研究所
73	日本東京海上日動火災保険株式会社
74	日立高科技貿易(上海)有限公司
75	日立租賃(中国)有限公司
76	阪和興業株式会社
77	ブラザー(中国)商業有限公司
78	北京HYFソフト有限公司
79	北京キューピー食品有限公司
80	北京KDDI 通信技術有限公司
81	北京宏達日新電機有限公司
82	北京新世紀日航飯店
83	北京図新経緯導航系統有限公司
84	北京日立華勝信息系統有限公司
85	北京日立控制系統有限公司
86	北京村田電子有限公司
87	本田技研工業(中国)投資有限公司
88	前田建設工業株式会社
89	三井化学株式会社
90	三井住友海上火災保険株式会社
91	三菱自動車工業株式会社
92	三菱重工業株式会社
93	三菱UFJ証券株式会社
94	三菱UFJ信託銀行
95	明治安田生命保険相互会社
96	明和産業株式会社
97	柳田　洋
98	湯浅　弘
99	理光軟件研究所(北京)有限公司
100	ヤマハ発動機株式会社

〔寄付金額〕10万円未満

101	北京エプソン電子有限公司
102	北京集佳知識産権代理有限公司
103	日本海事協会

2007年度　中国日本商会役員一覧

11月度現在

	商会役職	氏　名	会社名	役職
1	会長	北川　信夫	住友商事	常務執行役員　中国総代表
2	副会長	岩崎　次彌	アサヒビール	常務執行役員　中国本部長
3	副会長	白井　省三	アルプス(中国)	総経理
4	副会長	桑山　信雄	伊藤忠	常務執行役員　中国総代表
5	副会長	小澤　秀樹	キヤノン	取締役　中国総裁
6	副会長	石舘　周三	資生堂(中国)研究開発中心	董事　総経理
7	副会長	小谷　勝彦	新日本製鐵	中国総代表　北京事務所長
8	副会長	山崎　邦生	全日本空輸	上席執行役員　中国総支配人兼北京支店長
9	副会長	磯貝　匡志	トヨタ自動車(中国)	トヨタ自動車(中国)　総経理
10	副会長	高島　竜祐	日中経済協会	北京事務所長
11	副会長	柴生田敦夫	日本貿易振興機構	北京代表処　所長
12	副会長	塚田　實	日立(中国)	執行役専務　中国総代表兼董事長
13	副会長	磯貝　眞理	丸紅	専務執行役員　中国総代表
14	副会長	浅井　邦夫	みずほコーポレート銀行	北京支店長
15	副会長	小川真二郎	三井物産	常務執行役員　中国総代表
16	副会長	中原　秀人	三菱商事	常務執行役員　中国総代表
17	理事	里井　庚二	岩谷産業	中国総代表
18	理事	大田　義実	双日(中国)	常務執行役員　中国総代表
19	理事	横井　昭正	豊田通商	中国総代表
20	理事	村上　秀樹	阪和興業	北京事務所　所長
21	理事	渋谷　龍一	住金物産	北京事務所　所長
22	理事	加悦　文雄	東工物産貿易	北京分公司　副総経理
23	理事	小笠　一之	株式会社IHI	北京代表処　首席代表、所長
24	理事	小林　北洋	出光能源諮詢（北京）	董事長　総経理
25	理事	高橋　千秋	竹中工務店	首席代表
26	理事	張　寿山	東洋エンジニアリング	首席代表
27	理事	萱島　幸久	日産（中国）投資有限公司	董事　総経理
28	理事	山浦　重雄	日立金属	北京駐在員事務所　所長
29	理事	堤　直樹	前田建設工業	北京駐在員事務所　首席代表
30	理事	真崎　秀介	NTT	中国総代表
31	理事	猪瀬　崇	NTTコミュニケーションズ	中国総代表
32	理事	佐野　　昇	NTTドコモ	北京事務所　所長
33	理事	西岡　邦彦	国際通信経済研究所	北京代表処　首席代表
34	理事	高篠　静雄	ソニー株式会社	副社長　中国総代表
35	理事	田中　孝明	東芝(中国)	総裁
36	理事	金子　肇	日電（中国）	総裁
37	理事	武田　春仁	富士通(中国)	常務理事　中国副総代表　　総経理
38	理事	吉本　哲也	松下電器（中国）	副総裁
39	理事	森山　博之	旭化成	北京事務所　所長
40	理事	松永　収二	味の素(中国)	副董事長　総経理
41	理事	美崎　正之	荏原環境工程(北京)	董事　総経理
42	理事	矢野　公一	大日本印刷	常駐代表
43	理事	辻　隆久	帝人	駐中国総代表
44	理事	大森　智之	日本ガイシ	北京代表処　首席代表
45	理事	池本　一彦	三菱化学	理事　北京事務所長
46	理事	青山　淳	横河電機(中国)商貿	総経理
47	理事	張　黎迎	住友信託銀行	北京代表処　首席代表
48	理事	徐　欣君	日興コーディアル証券(株)	首席代表
49	理事	瀬口　清之	日本銀行	北京事務所　首席代表
50	理事	太田　忠利	三井住友銀行	北京代表処　首席代表
51	理事	光井　良	三菱東京ＵＦＪ銀行（中国）	北京支店長
52	理事	橋本　万里	明治安田生命保険	北京事務所　首席代表
53	理事	森　哲夫	天宇客貨運輸服務	総経理
54	理事	深田　信	日本航空インターナショナル	上席執行役員　中国総代表
55	理事	服部　浩	日本郵船	中国総代表
56	理事	高羽　人志	株式会社ジェイテイービー	北京事務所　事務所長
57	理事	塙　昭彦	イトーヨーカ堂	取締役　中国総代表
58	理事	鈴木　理之	電通	役員待遇　中国総代表
59	理事	広岡　幹雄	日航国際旅行社	董事長　総経理
60	理事	長谷川　秀範	北京発展大廈	董事　総経理
61	理事	田淵　真次	日中経済貿易センター	専務理事　北京事務所長
62	理事	中下　裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所　所長
63	理事	冨田　重男	北京日邦印刷	董事長
64	理事	西川　隆博	三菱電機（中国）	役員理事　中国総代表
65	理事	渡辺　健一	国際ユニオンリース	総経理
66	理事	小塩　隆司	長富宮中心	総支配人
67	理事	加茂　廣	トヨタ汽車技術中心（中国）	知的財産部部長
68	理事	井上　洋文	電源開発	北京事務所長
69	監　事	三浦　智志	監査法人トーマツ	パートナー
70	監　事	辻井　渉	国際協力銀行	首席代表

2007年度社会貢献委員会委員名簿

	氏　名　（会社名・役職）
社会貢献委員長	磯貝　匡志　（トヨタ自動車(中国)　総経理）
委員	小澤　秀樹　（キヤノン　取締役　中国総裁）
委員	高羽　人志（株式会社ジェイテイービー 北京事務所　事務所長）
委員	石舘　周三　（資生堂(中国)研究開発中心　董事　総経理）
委員	小谷　勝彦　（新日本製鐵　中国総代表　北京事務所長）
委員	深田　信　（日本航空インターナショナル　上席執行役員　中国総代表）
委員	高島　竜祐　（日中経済協会　北京事務所長）
委員	栗田　弘毅　（トヨタ自動車㈱　渉外部主査）
委員	程　雅琴　（トヨタ自動車㈱　渉外部主管）
委員	磯貝　眞理　（丸紅　専務執行役員　中国総代表）
委員	浅井　邦夫　（みずほコーポレート銀行　北京支店長）

2007年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	磯貝　匡志	トヨタ自動車(中国)　総経理
【WG座長】	高島　竜祐	日中経済協会 北京事務所長
住友商事	赤石　俊也	華北管理部門　総括部　副部長
	韓　建平	総括部　総務科長
アサヒビール	斉藤　博紀	経営管理グループ　主任
アルプス	中村　邦彦	人事総務部長
伊藤忠	宮西　英明	副総経理
キヤノン	原　浩一郎	企画本部　DIRECTOR
資生堂	石舘　周三	董事　総経理
新日本製鐵	扇　常夫	代表
JTB	高羽　人志	事務所長
全日本空輸	西尾　敏	営業部　シニアマネージャー
トヨタ自動車	栗田　弘毅	渉外部主査
	程　雅琴	渉外部主管
日中経済協会	葛西　敦	所長代理
日本航空	柴田 晃伸	中国地区旅客営業部副総経理
日本貿易振興機構	宗金　健志	進出企業支援センター　副センター長
日立	加子　茂	グループ会社業務シナジー推進センター総経理 コミュニケーションプラットフォーム本部長
松下電器	王　彦峰	社会貢献・渉外部　部長
丸紅	澤田　健太郎	人事総務部長
みずほコーポレート銀行	武沢 弘貴	総務課 課長
三井物産	許　小薇	業務人事部　部長助理
三菱商事	李　征	中国総代表室　経理
三菱東京UFJ銀行	久富　真之	取引先二課　支店長代理
【オブザーバー】	横井　理夫	広報文化センター　一等書記官
【オブザーバー】	島　美奈子	経済部　三等書記官

【訪日中のアテンド等】	渡辺　光男	日中経済協会 （東京） 総務部参与

袁敏道団長挨拶

第 2 回中国大学生《走近日企・感受日本》訪日団一行 36 名が、中国日本商会、日中経済協会と商会会員企業の行き届いた手配の下、日本での 10 日間の見学と学習を終え、日本の友人の深い友情と素晴らしい思い出を胸に北京に戻ってまいりました。

今回の訪問は中日国交正常化 35 周年、中日関係がこれまでの膠着状態を打ち破り、大きく動き始めるという背景の中で実施されました。中国の有名大学 5 校から 30 名の大学生が、日本を更に理解し、日本に学び、中日交流に貢献すべく代表団に参加しました。10 日間の日程の中で、代表団はそれぞれ特色のある企業 8 社を見学したほか、日本の農村や早稲田大学を訪問しました。日本の秋の美しい風景を愛で、山中の温泉も体験することができました。また、30 名の大学生はそれぞれ日本人家庭の心温まるもてなしを受けました。代表団に参加した 30 名の中国の若者にとって、今回の訪問は日本の社会を全面的に理解するための貴重な機会であり、知識を深め、視野を広げ、また至近距離から日本を観察し、日本国民に中国の若者の姿を示すことのできた 10 日間でした。訪問日程は充実したもので、多くの収穫がありました。具体的なことは、それぞれ学生諸君の感想文に書かれていますので、ここで割愛させていただきます。

今年は中日平和友好条約の締結 30 周年にあたり、また中日青少年交流年と北京オリンピックが開催される年であります。昨年は両国首相による相互訪問が実現し、中日間の戦略的互恵関係が強化され、両国関係に良好な発展の兆しが見えて来ました。今年は桜の花の咲く頃に胡錦濤主席が日本を訪問することになっていますが、この訪問によって中日関係の発展が推進され、新たな段階に入るものと確信しております。今後も友人の皆様と共に、両国人民、特に両国の青少年の相互理解と友好を増進し、中日間の友好協力関係の長期かつ健全、安定的な発展のために新たな貢献をしていきたいと思っております。

最後に、この交流計画の実施のために大変なご支援とご尽力をいただきました中国日本商会の友人の皆様、並びに中日双方の関係者各位に対し改めて心より感謝を申し上げます。そして中国の大学生の日本訪問活動がますます成功し、中日友好の種子が両国の若者の心の中で花を咲かせ、実を結び、代々伝わっていくことを願ってやみません。

中日友好協会　副秘書長

第 2 回中国大学生訪日団 団長 **袁敏道**

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、１９８０年１０月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第３６号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第１号として、１９９１年４月２２日に設立された。

会員数は、２００８年２月２０日現在、市内法人会員６１７社、市外法人会員４９社、個人会員４４名、賛助会員８名の合計７１８社（名）を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、１９９６年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

財団法人貿易研修センター

国際的な経済活動に携わる官民の人材の育成と我が国と外国との経済交流促進を目的に、「貿易研修センター法」に基づく特別認可法人として１９６７年に設立された。

財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、１９７２年に設立された。

中国大学生《走近日企・感受日本》訪日団(第２回) 団員名簿

		姓　名	性別	所属、役職
1	団　長	袁　敏　道	男	中国日本友好協会 副秘書長
2	団　員	李　　月	女	北京大学経済学院
3	団　員	李　　林	男	北京大学哲学系
4	団　員	劉　　薇	女	北京大学考古文博学院
5	団　員	李　　鑫	女	北京大学政府管理学院
6	団　員	房　　瑤	女	北京大学社会学系
7	団　員	董　旭　超	男	北京大学法学院
8	団　員	白　晨　晨	女	北京工業大学機電学院
9	団　員	楊　　波	男	北京工業大学建築工程学院
10	団　員	宋　大　林	男	北京工業大学応用数理学院
11	団　員	張　　旭	男	北京工業大学環境能源工程学院
12	団　員	秦　　桐	女	北京工業大学生命科学・生物工程学院
13	団　員	劉　　雷	男	北京工業大学電子信息控制工程学院
14	団　員	彭　　韡	女	北京航空航天大学材料科学工程学院
15	団　員	周　　池	女	北京航空航天大学電子信息工程学院
16	団　員	胡　　鈺	女	北京航空航天大学自動化電気工程学院
17	団　員	楊　　強	男	北京航空航天大学能源動力工程学院
18	団　員	楊　　一	男	北京航空航天大学航空科学工程学院
19	団　員	劉　　傑	男	北京航空航天大学中法工程師学院
20	団　員	王　亦　然	女	北京郵電大学信息工程学院
21	団　員	衣　　倩	女	北京郵電大学計算機科学・技術学院
22	団　員	范　　凡	男	北京郵電大学電信工程学院
23	団　員	張　朝　偉	男	北京郵電大学計算機科学・技術学院
24	団　員	笱　　晨	女	北京郵電大学語言学院日語系
25	団　員	李　　鵬	男	北京郵電大学電子工程学院
26	団　員	趙　　陽	男	南開大学経済学院
27	団　員	王　坤　芳	女	南開大学経済学院
28	団　員	韓　　健	男	南開大学哲学系
29	団　員	劉　　侃	男	南開大学哲学系
30	団　員	郭　暁　菲	女	南開大学経済学院
31	団　員	李　欣　瑞	女	南開大学経済学院
32	事務局	郭　　寧	女	中国日本友好協会経済交流･都市交流部 副部長
33	団　員（引率教員）	張　　岩	女	北京工業大学建築工程学院
34	団　員（引率教員）	常　悦　珠	女	北京郵電大学国際交流処
35	団　員（引率教員）	関　　艶	女	南開大学国際学術交流処

第 2 回中国大学生《走近日企・感受日本》訪日団視察日程

日次	月日	日程	宿泊地
①	11 月 26 日 （月）	14：15 北京首都国際空港発（NH160 便） 18:：50 関西国際空港着　到着後バスで大阪市内に 21：00 大阪市内ホテル着	大　阪 **クロスホテル大阪**
②	11 月 27 日 （火）	08：30　ホテル発 10：00　オムロン京都太陽工場視察 14:30～17:00 京都市内観光（高台寺、清水寺） 17:32 京都発「のぞみ 144 号」にて名古屋へ 18:08 名古屋着　ホテルへ	名古屋 **ロイヤルパークイン名古屋**
③	11 月 28 日 （水）	08：00　ホテル発 09:30～13:00　トヨタ自動車工場視察＆トヨタ会館見学 15：04　名古屋発「のぞみ 90 号」にて横浜へ 16：30　新横浜駅到着、バスにてホテルへ	横　浜 **ホテルモントレ横浜**
④	11 月 29 日 （木）	07：30　ホテル発 08：45～10：15　資生堂鎌倉工場視察 11：15～12：15　新日本石油根岸製油所視察 15：00～16：30 **NEC**ブロードバンドソリューションセンター視察 17：00～21：15　住友商事東京本社視察 22：00　ホテル着	東　京 **ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾘﾝｽﾎﾃﾙ赤坂**
⑤	11 月 30 日 （金）	午前中　都内観光（東京タワー、皇居前） 12:00～14:00　みずほコーポレート銀行東京本店視察 15：30～21：00　東京ディズニーランド観光 22：00　ホテル着	東　京 **ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾘﾝｽﾎﾃﾙ赤坂**
⑥	12 月 1 日 （土）	09：30-10：00　日中経済協会にて引渡 ホームステイ家族の中国大学生出迎え	ホームステイ
⑦	12 月 2 日 （日）	午前～午後　ホームステイ 16：00　グランドプリンスホテル赤坂に集合 チェックイン後バスにてお台場へ（2 時間自由行動） 20:00 ホテル着	東　京 **ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾘﾝｽﾎﾃﾙ赤坂**
⑧	12 月 3 日 （月）	08：30　ホテル出発 10：30～15：30　野菜くらぶ視察（群馬県） 15：30　水上へ 16：30　水上着　日本式旅館＆温泉体験	水上 **水上館**
⑨	12 月 4 日 （火）	07：10　ホテル出発 07：55　上毛高原発「新幹線とき 304 号」で東京へ 09：12　東京駅到着後、バスにて移動 10：30～13：30 ＡＮＡ機体メンテナンスセンター視察 14：00～15：15　中国大使館孔鉉佑公使表敬 16：00～20：00　早稲田大学交流・懇親 20:30　ホテル着	東　京 **ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾘﾝｽﾎﾃﾙ赤坂**
⑩	12 月 5 日 （水）	午前：帰国準備 12：00～13：30　送別パーティー 13：30　出発　成田空港へ 17：20　成田国際空港発（NH955 便） 20：05　北京首都国際空港着	

第 2 回中国大学生《走近日企･感受日本》訪日団視察先出席者リスト

１．オムロン京都太陽株式会社（11 月 27 日）

北村　満　　オムロン京都太陽㈱　代表取締役社長
用田　竹司　　オムロン京都太陽㈱　総務課
池田　康広　　オムロン京都太陽㈱　生産管理課
大和田　雅司　　オムロン㈱　取締役室　渉外グループ　主幹
関　軍　　オムロン㈱　取締役室　渉外グループ　主事

２．トヨタ自動車（11 月 28 日）

磯谷　健　　トヨタ自動車㈱　中国部長
安川　隆志　　トヨタ自動車㈱　中国部　主査
原口　英二郎　　トヨタ自動車㈱　中国部　営業室長
佐藤　啓介　　トヨタ自動車㈱　中国部　営業室　企画総括グループ長
福田　麗子　　トヨタ自動車㈱　中国部　事業企画グループ
永島　均　　トヨタ自動車㈱　企業 PR 部　係長
岩月　麻友美　　トヨタ自動車㈱　企業 PR 部
小川　桃子　　トヨタ自動車㈱　社会貢献推進部　グループ統括室海外事業体グループ
山本　修巳　　トヨタ自動車㈱　グローバル渉外広報企画部第 2 地域室主査　担当部長
榎本　裕子　　トヨタ自動車㈱　グローバル渉外広報企画部　第 2 地域室
範　広寧　　トヨタ自動車㈱　グローバル渉外広報企画部　第 2 地域室中国グループ

３．株式会社　資生堂　鎌倉工場（11 月 29 日）

高原　明彦　　㈱資生堂　中国事業部　次長
岩城　泰雄　　㈱資生堂　中国事業部
元　菲　　㈱資生堂　中国事業部
大洲　洋子　　㈱資生堂　中国事業部
佐藤　昭美　　㈱資生堂　鎌倉工場　管理部　総務・人事 2G

４．新日本石油精製株式会社　根岸製油所（11 月 29 日）

北村　武晴　　新日本石油精製㈱　根岸製油所　総務グループ　シニアスタッフ
川畑　絵美　　新日本石油精製㈱　根岸製油所　総務グループ

５．日本電気株式会社　ブロードバンドソリューションセンター（11 月 29 日）

長岡　正道　　日本電気㈱　中国事業推進部　部長代理
石　暁梅　　日本電気㈱　中国事業推進部　エキスパート
篠塚　潔　　日本電気㈱　中国事業推進部　主任

李　忠烈　　日本電気㈱　中国事業推進部
林　瑶　　日本電気㈱　海外キャリア営業本部

６．住友商事株式会社（11 月 29 日）

川原　卓郎　　住友商事㈱　執行役員　ｺｰﾎﾟﾚｰﾄ・ｺｰﾃﾞｨﾈｰｼｮﾝ・ｵﾌｨｻｰ補佐
井場　満　　住友商事㈱　広報部長
武井　徹　　住友商事㈱　地球環境部長
保井　正敏　　住友商事㈱　広報部　社会貢献チーム長
菅谷　百合子　　住友商事㈱　広報部　社会貢献チーム
林　麻衣子　　住友商事㈱　広報部　社会貢献チーム
川村　哲也　　住友商事㈱　地域総括・調査部　部長代理
　　㈱住友商事総合研究所　中国部長
横田　博　　㈱住友商事総合研究所　中国部　部長代理
森川　麟三　　㈱住友商事総合研究所　中国部　参事
朴　龍権　　㈱住友商事総合研究所　中国部
内藤　常男　　住商ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸｽ㈱　代表取締役社長
塚田　清　　住商ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸｽ㈱　国際事業本部　国際物流第２部中国チーム
呉　芳　　住商ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸｽ㈱　〃　国際物流第２部　中国・アジアチーム
符　李瑋　　住商ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸｽ㈱　ﾛｼﾞｽﾃｨｸｽ・ｻｰﾋﾞｽ本部輸出第３部第１チーム

７．株式会社　みずほコーポレート銀行（11 月 30 日）

中村　英剛　　㈱みずほコーポレート銀行　常務執行役員
茶谷　康広　　㈱みずほコーポレート銀行　中国営業推進部　次長
白井　和樹　　㈱みずほコーポレート銀行　中国営業推進部　調査役
林　純如　　㈱みずほコーポレート銀行　中国営業推進部　調査役
王　旻　　㈱みずほコーポレート銀行　中国営業推進部　経理
崔　京月　　㈱みずほコーポレート銀行　中国営業推進部
吹田　恒久　　㈱みずほコーポレート銀行　アジア業務管理部長
加藤　純一　　㈱みずほコーポレート銀行　ALM 部長
小日向　聡　　㈱みずほコーポレート銀行　ALM 部　市場管理チーム　参事役
榎本　隆弘　　㈱みずほコーポレート銀行　ALM 部　市場管理チーム　参事役
末永　明　　㈱みずほコーポレート銀行　国際管理部　副部長
葉　婧　　㈱みずほコーポレート銀行　国際為替部　為替営業第二チーム
呂　新一　　㈱みずほコーポレート銀行　国際資金証券部　外債投資チーム
　　チーフストラテジスト

８．株式会社　野菜くらぶ（12 月 3 日）

澤浦　彰治　　㈱野菜くらぶ　代表取締役社長

毛利　嘉宏　　㈱野菜くらぶ　取締役　事業本部本部長
呉　超峰　　㈱野菜くらぶ　事業部　栽培管理課
竹之内　信一　　㈱野菜くらぶ　取締役
竹内　泉　　㈱サングレイス　農場長（トマトハウス）

９．全日本空輸株式会社（12 月 4 日）
福田　哲郎　　全日本空輸㈱　整備本部　企画推進部長
岡部　真人　　全日本空輸㈱　整備本部　企画推進部　総務チーム
西尾　敏　　全日本空輸㈱　北京支店マネージャー
木谷　秀幸　　全日本空輸㈱　整備本部　機体メンテナンスセンター　機体整備部
　　テクニカルサポートチーム　主席整備士
川井　欣昭　　全日本空輸㈱　整備本部　機体計画部　整備計画チーム
劉　宇　　全日本空輸㈱　大連支店空港所

１０．　早稲田大学（12 月 4 日）
白木　三秀　　早稲田大学　政治経済学術院教授　留学センター所長
江　正殷　　早稲田大学　国際部　副部長
照原　陽子　　早稲田大学　国際部　学生交流企画課　兼
　　留学センター　派遣留学プログラムコーディネーター
他に、早稲田大学留学センター学生留学アドバイザー、白木ゼミ生、 留学生他　約 40 名が参加

１１．　中華人民共和国駐日本国大使館（12 月 4 日）
孔　鉉佑　　中華人民共和国　駐日本国大使館　公使
孫　美嬌　　中華人民共和国　駐日本国大使館　参事官
喬　倫　　中華人民共和国　駐日本国大使館　政治処　二等書記官
李　桂萌　　中華人民共和国　駐日本国大使館　交流処　三等書記官

１２．　送別パーティ出席者（12 月 5 日）

出席者　87 名

団側：35 名＋中国日企 1 名（王建鋼）＝36 名

○外務省　欠席

○経産省　小口真智子

○中国大使館　喬倫、李桂萌

（視察企業の窓口およびホストファミリー）

○オムロン　関軍

○トヨタ自動車　山本智子

○資生堂　岩城泰雄、森田竜史、荻野秀子

○新日石　欠席

○NEC　欠席

○住友商事　川村哲也、内藤常男、横田博

○みずほ　呂新一

○全日空　溝口裕子、北村徹

（ホストファミリー）

○アルプス電気　中村裕子、山内和久、入野和之

○伊藤忠商事　関伊知郎

○キヤノン　澤田澄子

○日本航空　山内光

○日立化成　鳥海英郎

○日立製作所　久保田慎一、趙薇

○松下電器　欠席

○マルチメディア　欠席

○丸紅　重山直美、上田益孝、徐陽

○三井物産　斉藤江美

○三菱商事　欠席

○三菱東京 UFJ　中村敬、福田浩正、田辺智彦

○新日本製鐵　欠席

○早稲田大学　白木三秀、照原陽子

（学生）鹿毛綾奈、王文嘉、関政和、笠井裕樹、平石知也

○JTB　JTB 西日本　古野浩樹　　JTB　行徳尚文、呂純明

○貿易研修センター　大慈弥隆人、竹中速雄、加藤晴美

○日中経済協会　清川佑二、稲葉健次、関誠、武田雄博、中島俊輔、横山主任、眼崎聖子
渡辺光男

オムロン京都太陽株式会社

北京大学　董旭超　李林

企業概要紹介

オムロン京都太陽株式会社は、オムロン株式会社と社会福祉法人太陽の家が共同出資して設立した会社である。企業と福祉の橋渡し的役割を担う同社は、身体障害者（以下、「身障者」という）への雇用機会の提供および雇用の安定と社会福祉の確保に努め、身障者が自分で働くことを通して生きがいを感じられるような企業環境を醸成することを目的にしている。

「企業は社会に貢献するための存在である」というのが、オムロンの企業理念である。

1971 年、社会福祉法人太陽の家の創立者である中村裕氏は、身障者に働く場を提供してくれるように企業にお願いして回ったが、応じてくれるところは皆無だった。そうした中、オムロンの創業者である立石一真氏が、中村氏と多くの身障者のために福音をもたらした。当時、日本経済は「ドルショック」による深刻な不況の真っ只中にあったが、立石氏は身障者に社会復帰の場を提供したいという一心で専用の工場を立ち上げた。翌年の 1972 年、世界初の身障者に雇用の機会を与える企業としてオムロン太陽電機株式会社が設立された。それが即ちオムロン京都太陽株式会社の前身である。

写真 1　オムロン京都太陽の作業場

オムロンの企業文化

1.人間にやさしい管理モデル

オムロン京都太陽では、社員の主体が身障者となっているため、人間にやさしい運営モデルが必要不可欠であることは言うまでもないが、それがまた同社の明確な企業文化の特徴にもなっている。

業務運営においては、同社は「自動化技術の細やかさをもって身体の障害を補う」という運営モデルを導入するとともに、社会福祉法人の本旨である「たとえ身体に障害があっても、その就労能力には関係ない」ことを徹底させることで、身障者の雇用を確保し、人にやさしい作業環境の構築に取り組んできた。例えば、機械の設計という一例をとってみても、賞賛に値するところがある。機械が身障者の制御できる範囲内に設置されているのみならず、障害が左手にあるのか、それとも右手にあるかによって、それぞれ機械の位置が微調整できるようになっているのだ。同社は市場で調達した機械は、必ず身障者が使いやすいように改造するということだが、これは中々真似のできることではないと思った。

生活面においても人間にやさしい管理理念が貫かれている。具体的には、まず食堂の管理が挙げられる。身障者の生活をバックアップするため、同社の食堂は朝・昼・晩の三食を提供しているが、従業員の健康に配慮して、一日の摂取カロリーを 2400kcal 以内にコントロールしている。次に自動販売機の改造が挙げられる。一般の自動販売機は健常者を念頭に作られているため、身障者の手が届かない場合が多い。この状況を改善すべく、工場内に設置される自販機をすべて設計し直し、身障者でも簡単に使えるようにしている。ま

た、エレベーターもユニバーサルデザインによって車椅子の出入りが便利になっているところを見たときには感激した。

2.コストの削減

日本の製造業がどんどん海外移転を始める中、従業員のほとんどが身障者であることを鑑みると、オムロン京都太陽にとって生産コストの削減が喫緊の問題になっていることが分かる。

それに対する取り組みの第一歩として、見学中に目にした日常的な節約が挙げられる。工場の中の蛍光灯一つひとつにスイッチ紐がついており、必要のないときに蛍光灯をこまめに消して電力を節約していた。その後、同じような取り組みを他社でも目にしたが、太陽の作業場が最初だったということもあり、特に印象的だった。

第二に、同社はコストを抑えるために自動化技術を多用し、作業の効率化に努めている。生産過程における技術と管理手法はすべて従業員が独自に開発したものであり、そこには身障者たちの価値観が反映されている。

第三に、製品の付加価値によってコスト圧力を相殺するという取り組みがある。例えば、同社の看板製品でもあるコンセントには一定の付加価値が認められる。

3.身障者の智恵を活用する

見学では、ほとんどの従業員が日々単調なライン作業を繰り返しているように見えたが、工場には彼らの智恵によるたくさんの工夫がなされていた。初代工場長がなんとラインで働く身障者であったことは注目に値する。

工場の 2 階に部屋が一つ設けられ、そこでは 6 名の従業員が技術開発に取り組んでいたが、そのうちの 4 名が身障者だった。このことからも分かるように、知的レベルにおいて身障者は健常者にまったくひけをとらない存在なのだ。

また前述したように、工場の管理体制改革と技術革新の多くが、身障者によって行われている。例えばアクセスというソフトを使って管理プログラムを開発したり、赤いサプライラックを独自に開発したりしている。最後に業績優秀なデザイナー2 名の紹介があった。

写真 2：北村社長と筆者の記念写真

オムロン精神

オムロン京都太陽は「企業は社会に貢献するための存在である」という理念のもと、「障害があっても諦めることなく、自動化技術の細やかさをもって身体の障害を補い、健全な機能を十分に発揮させていく」という原則を徹底させ、企業文化を支えに、世界のユーザーに満足のいく製品を提供している。

日本の『身体障害者雇用促進法』の規定によると、民間企業における身障者の雇用割合は 1.5%で、公的企業の場合は 1.9%、国・地方の政府機関と公的機関の場合は 2%となっている。統計によると、日本企業における身障者の平均就業率は 1.52%で、法的基準値をやや上回っているという状況だが、オムロン京都太陽の従業員総数に占める身障者の割合は 2.5%超になっている。同社は高い品質と社会福祉を同じように重んじる企業精神に基づき、科学技術をもって身体の障害を補うことに心血を注いでいる。同社は「人に魚を与えればその日の糧にはなるが、魚の釣り方を教えれば一生の糧になる」こと、一人ひとりが意欲をもって働き、自立して生活することこそが大事だという信念をもって日々の業務に励んでいる。

今まさに経済の高度成長期にある中国の社会と企業は、オムロン京都太陽のこうした企業精神を見習うべきだと思う。

第 2 回《走近日企、感受日本》訪問記
イノベーションに関する多重的解釈

北京工業大学学生代表

「車到山前必有路、有路必有豊田車(車が山のふもとに到れば必ず道がある。道があれば必ずトヨタの車がある)」。トヨタは世界でも有数の自動車ブランドである。11 月 28 日(水)、中国大学生《走近日企、感受日本》訪日団来日 3 日目の午前、私たちは愛知県豊田市のトヨタ自動車堤工場とトヨタ会館を見学した。トヨタ自動車国内 12 工場のうちの 10 工場が愛知県にあることから、その一帯が豊田市と改称されたというが、このことからも当地におけるトヨタの生産規模の大きさがうかがえる。説明員の岩月さんからは「もちろん、輸送コストの削減が、ここに工場を集中させている本当の理由です」という説明があった。

自動車の生産にはプレス・溶接・塗装・組立の 4 工程があり、一台の自動車を生産するのに要する時間は 20 時間を超えるという。堤工場の組立工程と溶接工程を見学したが、細かく区切られたラインで作業員が忙しそうに立ち働いていた。工場見学では、トヨタ自動車のいわゆる「ジャストインタイム」、「自動化」、「可視化」という生産理念を理解することができた。「ジャストインタイム」に部品の使用状況を把握するための「かんばん」――部品の情報を書き込んだ伝票が部品箱に貼られ、作業員の組立作業や部品メーカーからの受け渡しがしやすいようになっていた。こうすれば時間の節約にもなるし、在庫も減らすことができる。次に、トヨタのいわゆる「自動化」とは、単なる機械による自動化ではなく、作業員が主体的に作業に取り組む意欲をいう。つまり主体的な作業を通じて品質上の問題を自工程で解決するということである。ここでは「ひもスイッチ」が採用されていた。作業員が何か問題を発見した時に、生産ラインの傍にあるこの「ひもスイッチ」を引くのだ。すると、音楽が鳴り出し、応援の人が駆けつけてトラブルを解消するという仕組みになっている。そういうわけで、私たちは工場内でいろいろな音楽を聞くことになった。「可視化」とは、トラブルが速やかに解決できるように、天井に取り付けられたプラズマディスプレイに問題発生箇所が表示される仕組みをいう。説明員によれば、どんな小さなトラブルでも、「可視化」によってすぐに解決策を講じることが出来るので、生産ラインが止まることはないという。なお、溶接工程は組立工程と違って主にロボットによる作業が行われていた。

次にトヨタ会館 1 階ホールに展示されていた同社の主なモデルを見学した。ハイブリット車のプリウスも展示されていた。最後にロボットによる音楽の演奏もあった。

イノベーションと言えば、中国人は「最新かつ最先端的の技術」、「To create something」という言葉を思い浮かべる人が多いが、トヨタはそれ以上に品質のコントロールとコスト削減に重きを置いている。最先端の省エネ・エコ型自動車の開発といったハイテク技術ば

かりでなく、より実際的なこととして「自己改善」を基本的着眼点として、イノベーションという概念を真の意味で商業モデルに応用している。「良い製品の陰には良い思想があり」、常に改善を繰り返してしていくことこそが、会社が発展するための要点である。そして良い思想のために は良い制度が必要となるが、トヨタでは東洋と西洋の長所を取り入れた管理方式に基づき、個人責任制の奨励メカニズムが実施されている。このメカニズムの下では、どの従業員も「（会社の）主人公」としての意識を持ち、会社を自分の家にように捉えている。新卒の新入社員は 1 ヶ月から 2 ヶ月の間、生産現場の第一線に立ち、作業員としての生活を体験する。それから約 3 ヶ月間セールス（主に家庭訪問）に携わった後に、研修（総括、A3 報告書など）に参加する。こうして各部門の従業員の意識と習慣を統一し、会社の上から下まで常に「なぜ」と考える習慣を身につけさせるようにしている。年間一人当たり 11.2 件のアイディアが採用されているという。まさにこうしたシステムにより、製品設計において企画・マーケティング・技術・調査などの各部門の統合が可能となり、以前は 2 年かかっていた製品企画が今では 6 ヶ月で済むようになっている。生産方式では、「自動化」（全工程で品質を管理し、不良品が次工程に送られないようにする）と「ジャストインタイムの生産」（必要な製品を必要な時に必要な数だけ生産する）の二大理念が守られている。すべての組立途中の車には「かんばん」があり、部品の使用状況がはっきりと把握できるようになっている。また、作業に何か問題があれば、その工程の作業員が「ひもスイッチ」を引いて知らせるので、生産管理システム全体が一目瞭然である。なお、最も先進的な生産環境管理理念によって廃棄物の排出量を最低基準まで削減している。例えば、組立工程と溶接工程は数年前まで毎年約 60 万トンの廃棄物を排出していたが、現在では先進的な鉄くず再生資源化技術によって鉄鋼材料のゼロエミッションを達成している。また、周辺の部品納入業者が迅速に部品提供してくれるので、在庫の削減にも成功している。加えて、多品種混合生産ラインにより「高品質、短納期、低コスト」を実現している。

トヨタの自己改善の中でも最も賞賛すべきは、恒常的な自己改善をベースにした自己追求と自己挑戦への取り組みである。なぜなら、自己追求とはまったくゼロからスタートし、無から有を生じるような新技術や新製品を創造することだからだ。

石油価格の高騰と再生不可能資源の不足という

問題に直面し、トヨタも効率的な省エネ製品の開発面で模索を続けている。顕著な例としては、ガソリンエンジンに手を加えることはせずに、電気自動車とガソリン車を上手に結合させた独創的なハイブリット車であり、先ずプリウスのシリーズ生産が開始された。2 台のエンジンを搭載しているが、1 台は普通のガソリンエンジンで、もう 1 台は発電機である。低速走行時は発電機によって電気エネルギーが提供され、高速走行時にのみガソリンエンジンが回転するようになっている。この技術には二つの強みがある。一つは電気エネルギーと化学エネルギーを結合させているために燃料の節約に効果があり、100 キロメートル走行するのに 3 リットル余りのガソリン消費ですむ。

これは実に画期的なことである。また、この技術は石油資源の不足に対応したもので、まさにこの石油不足を解決するために開発された技術だとも言える。もう一つの強みはハイブリッドエネルギーを使用しているために、二酸化炭素ガスの排出が削減できるという点である。二酸化炭素は地球温暖化の元凶である。「エコ」というテーマに適っているかどうかがトヨタの次の一手になっている。このハイブリット省エネ車はすでに 100 万台を販売しているが、これはこの新コンセプトの省エネ車が世間に充分受け入れられていることの表れだと言える。特に日本市場での売れ行きは好調で、至るところでプリウスを見かけた。日本国民が環境問題に敏感なことをよく理解し、一貫して省エネ製品の開発に努力してきたこともトヨタが今日の成功を収めた理由として挙げられる。

ハイブリッド車はトヨタにとって最初の一歩にすぎず、その社会および自然に対する責任感と絶えず自己追求を目指そうとする意識の高さにより、今後もさらに新しいタイプの省エネかつ環境にもやさしい燃料自動車、例えば燃料電池車（汚染物質ゼロエミッション）などの開発を進めていくものと思われる。

トヨタのイノベーション理念は自己改善と自己追求の二つに分けられる。自己改善はその主体から見ればイノベーションだと言うこともできるが、自己追求と発明精神がイノベーションの原動力になる。

今、イノベーションということが盛んに叫ばれているが、言うまでもなく、「大」は国から小は「企業」に至るまで、それらが発展するためにはイノベーションがどうしても必要になる。では、日本企業がなぜイノベーションを得意としているのかを考える時、その核心はその勤勉さにあるように思われる。日本企業は働くこと、工夫すること、試すこと、改善することに非常に熱心である。

勤勉は日本民族の優れた特性であり、日本企業の経営者も従業員も非常に勤勉だ。また、日本人は時間観念が強く、まるで 1 時間は 40 分だとでもいうように、何をするにもアッという間にやってしまう。こうした時間観念が日本企業の高効率を生み出しているとも言えるが、日本人のこうした勤勉さは常に上を目指す点にもよく表れている。顧客の多様化や個性化に対応し、製品設計、工程設計、組立を可能な限り標準化、モジュール化、ユニット化して柔軟な生産ができるようにし、競合相手よりも品質の良い製品を生産することに努めている。トヨタはあたかも無敵の精鋭部隊のようにイギリスの自動車産業に打撃を与え、ドイツとアメリカの自動車工業を凌駕するまでになった。また、日本のコンピュータメーカーは一時的ではあるが、IBM を世界のコンピュータ業界の王座から引きずり下ろしたこともあった。また、日本企業のチップと電子部品が大量に使われていることから、米国の飛行機を「日本の頭脳に米国製の機体」と揶揄する人もいる。

日本企業はこれまで技術と管理面のイノベーションを経営活動の最重要事項として捉え、イノベーションこそが事業を発展させるための原動力だと考えてきた。日本企業は単に技術を導入すること以外に、技術イノベーションに積極的に取り組み、西洋の先進的な管理手法を吸収して自己の管理面のイノベーションを進め、中国の伝統文化と西洋の先進理念を吸収することでその企業文化を培ってきた。

日本人の勤勉さの背景には長い歴史に裏打ちされた民族文化の蓄積があるが、私たち中

華民族の勤勉さや勇敢さもよく知られている。理念を打ち出すだけでは不十分で、いかに従業員の主観的能動性を引き出すかがむしろ重要であり、制度面や体制面からいかに従業員に自分こそが企業の主人公だということを認識させ、企業の発展と自己啓発とを結合させ、その利益と不利益を共有させていくかがより重要になる。上述のような勤勉さがあれば、イノベーションももっと身近なものになるように思う。

資生堂で美しさの全プロセスを体験
資生堂鎌倉工場見学レポート

北京航空航天大学見学者一同

期日：2007 年 11 月 29 日、9 時
場所：資生堂鎌倉工場
参観概要：以下の通り

資生堂は 1872 年の創立で百年余の歴史を誇る企業だ。9 時に一行 30 余名は、資生堂の鎌倉工場に到着した。

解説員に従って会議室に入り、まず資生堂の歴史を紹介するビデオを見た。それにより資生堂が最も力を入れていることが、消費者一人ひとりのために「健康で美しい生活」を提供することであり、その科学技術と信用によって、黙々と人々のために美しさを提供し続けてきたことを知った。

次に、一行は使い捨ての衛生帽をかぶり、粉塵除去装置を通ってから生産現場を見学した。化粧品は無塵環境で製造する必要があるので、現場の衛生意識は非常に高く、ガラス越しに参観するにもかかわらず、私たちは徹底的に「除塵」されることになった。（P1）

まず口紅の生産現場を見学した。作業員が一列に並んで流れ作業をしていた。

次に見学したのは乳液工場だったが、どうした理由かは知らないが、この日は機械が止まっていて、工場内はガランとしていた。乳液工場の具体的な工程はビデオを見て理解した。この工場は大きなガラスによって自動的に光が調整できるようになっているため、大量の電気が節約できる設計になっていた。また、外にたくさんの白いタンクがあったが、それは汚水処理のためのものだった。ゴミも分別処理され、工場が高効率な生産を追求するというだけでなく、環境も大変重視していることが見て取れた。

＜企業の特色＞

いろいろ考えながら見学しているうちに、たくさんの疑問がわいてきた。

まず不思議に思ったのは、資生堂は「広く人々の美しさのために」をその本旨とし、「新しく、より豊かな価値の源泉を追求し、人々により美しい生活文化を提供する」ことを企業の使命にしているわけだが、中国における資生堂の位置づけはミドル・ハイエンドブランドというものであって、一般消費者が気軽に買えるようなものではない。これについての資生堂側の答えは、「資生堂にも一般的（ローエンド）なブランドがある。どのブランドも同じだとは限らない。例えば「欧伯莱（Aupres）」などは、一般消費者向けに開発されたもので、製品設計ではあらゆる面が考慮されている」というものであった。

また、最近、ランコムや SKII の製品から有害物質が検出されているが、資生堂にもこうした品質問題があるか質問してみた。資生堂が製品の品質をどのように確保しているのか聞きたかったのだ。これについての資生堂の説明は、原料購入前にすべての原料に対し厳しい検査をするほか、購入後も検査を行っているというものであった。また、日本の薬物検査は非常に厳しく、それが製品品質上の最終関門になっているとのことだった。全体的

に見て、製品品質が非常に厳しくコントロールされていたが、資生堂の品質重視の態度は、見学の際に垣間見た生産現場に対する厳しい環境要求からも感じることができた。

また、資生堂の環境保護のための取り組みも印象に残った。ゴミを 39 種類に分別処理し、それぞれのゴミをできるだけ合理的に利用することで、最大限エネルギーを活用することに努めている。2001 年、資生堂は生産資料の 100%循環利用を実現し、ゼロエミッションを達成しているが、これは化粧品メーカーにとっては相当難しいことで、まったく敬服に値する。(P2)

なお、生産工程のレベルも高かった。例えば、非木材紙や分解性樹脂容器などの特殊素材を使っている。箱に印刷された説明書や分解性樹脂容器などの設計上の工夫が、製品の全体的品質を高め、資生堂の特色をよく出している。

＜感想と疑問＞

(1)原料と製造工程：製造工程は簡単だが、随所に細かい配慮がなされており、ハイエンドブランド確立への取り組みが見て取れた。

確かに有名高級化粧品には、多くの先進的かつ見習うべきところがあるが、それはこれまで自分が考えていたほど神秘的なものでないことが分かった。資生堂に限らず、どの高級有名ブランド化粧品にも共通していることだが、本当の意味で最大の利益を生み出しているものは、原料や製造工程ではなく、実はその入念な計画の下に創出されたブランド価値である。見ることも触ることもできないものでありながら、消費者に深く印象づけるブランドイメージは、まさに資生堂の厳選された原材料、厳しい検査、一見シンプルに見えながらも環境保全と節約意識が随所に見られる製造工程から生まれたものだと言える。そしてこれこそが中国の化粧品メーカーが見習わなければならない点だと考える。中国の化粧品メーカーは、まず原料と製造工程において消費者と社会を安心させ、製造過程においては資生堂が本旨として謳う「真に価値のある、高品質の製品を創造することで、消費者とともに幸せでありたい、美しくありたい、健やかでありたいという願いを分かち合う」ということを体現していかなければならない。

(2)企業の社的会責任（CSR）：対象とするターゲットが狭く、その手法がブランドコミュニケーション的色彩を帯びているのではないか。

資生堂の CSR は「安全と環境保護を最優先に考え、現地のコミュニティーや国際社会と協力し合い、その文化的資源を使って総合的かつ美しく、優雅なライフスタイルを構築する」ことをその趣旨にしている。

今回の訪日で見学したした他の企業と資生堂を比較すると、資生堂の CSR のターゲットと内容がブランドコミュニケーションのテーマとよく似ているという感が否めず、福祉や一般大衆といった視点がやや欠けているように思われる。

オムロンやトヨタ自動車などの企業の CSR は、それぞれのブランドの文化的テーマに沿いつつも、どれも社会全体をきちんと見据えたものになっていた。特に一般庶民（その大部分に製品購買力がまったくない可能性がある）への還元が行われていた。例えば、世界的な植樹活動をしたり、貧困地区に希望小学校や図書館を建てたりという活動などである。一方、資生堂の CSR は主に資生堂製品の潜在的購入者に対して行われており、その内容もそうした人々をターゲットにした美容とメイクテクニックの講習が主なものになっていた。大衆と向き合うという視点で見ると、資生堂製品の潜在的購入者であるということは、おそらくそれなりの購買力を持つ中高所得者層ということになるが、それは社会のほんの一握りに人たちでしかない。内容的なことを言えば、こうした中高所

得者層向けに美容とメイクテクニックの講習を行うことは、確かに資生堂が企業使命としている「新しく、より豊かな価値の源泉を追求し、それにより人々により美しい生活文化を提供する」ことを体現していることにはなるが、こうした誘導性の強いサービスの最終的な目的がどこにあるかははっきりしている。その意味で、資生堂の CSR が純粋な CSR なのかどうかについて考えてみる価値があるように思う。なぜなら、それがどうしても市場キャンペーンのように見えてしまい、企業の社会的責任を果たしているというようには思えなかったからだ。そしてさらに重要なことは、資生堂の CSR が社会の最大グループ、即ち一般庶民への福利ということを考えていないように思えた点だ。

製品の安全性、環境保全、資源節約等の面で、資生堂は手本とするに値することは間違いない。そして、確かにその製品を使い、サービスを受けるハイレベルな消費者群に対しては美しく優雅なライフスタイルを提供している。こうした点は中国の化粧品メーカーよりも進んでいると思う。資生堂の CSR がその理念において多少不十分と思われる点があるからと言って、それを全面的に否定するつもりはまったくない。ただ、そうしたやり方がすべて中国に合うというわけではないことを言いたかっただけで、やはり資生堂には中国が謙虚に学ぶべきものが多くあったことは確かである。

環境にやさしい製品作り

北京郵電大学

時間：2007 年 11 月 29 日　11：00～12：00

場所：新日本石油精製株式会社　根岸製油所
神奈川県横浜市磯子区鳳町 1-1

見学概要：

新日本石油根岸製油所に着くとすぐに担当者の方から概要説明があった。

新日本石油株式会社は日本最大の石油メーカーだ。根岸製油所では主に原油を加工・処理し、最終的な石油製品に仕上げている。「Every drop of crude is refined into products」を生産理念に掲げているが、それは原油を一滴残らず製品に変えるという意味だ。新日本石油はこうして石油資源を活かしきることで生産量を増やし、汚染の抜本的解決にも取り組んでいる。なお、新日本石油は利益追求と同時に、人間、石油、自然の調和のとれた発展にも心がけている。

日本最大の石油会社として、国際市場における原油製品のニーズに対応するため、最近数本の生産ラインを増設し、安全かつ効果的に良質の製品がいつでも生産できるような体制になっている。また、根岸製油所の石油製品は市場動向をベースに生産されており、市場のニーズを常にキャッチし、高品質な製品を市場の隅々まで届けられるようになっている。

生産活動のこうした取り組みのほかに、新日本石油は環境保全および事故発生時の緊急措置の実施にも努めている。環境保全に関しては、環境計画の作成―計画の改善―実施―検査―修正というシステムがすでにできあがっており、持続的な環境保全が確保されていた。生産段階から産業廃棄物の排出を抑制することで、水質や大気への影響を低減すると同時に、高品質な製品を作ることによって製品の消費過程における汚染を軽減することにも力を入れているが、新日本石油の社会的責任に対する認識が垣間見られた。

概要説明の後、バスに乗って製油所内を見学した。製油所は緑化がよくなされ、静かだった。港に停泊している石油タンカーの周りに柵が敷かれていたが、これは事故時の石油の漏れを防ぐためのものである。

（P　S　1）（P　S　2）

（P　B　3）

Q&A

見学をしているうちに、新日本石油の新しい生産方式と経営理念についての理解が徐々に深まってきたが、不明な点や疑問もいくつかあったので質問したところ、以下のような回答があった。

原油はどのように全て製品化されているのか？

原油は常圧蒸留塔で各成分の沸点の違いを利用して分溜される。そのうちのガソリンやディーゼル油はそのまま製品になるものもあるが、その一部はオクタン価を上げるための改質などの工程が必要になる。また、常圧蒸留塔で最後まで残った部分は残渣と呼ばれ、それをさらにクラッキングして改質し、他の精製油に混ぜて各種精製油の品質を高めている。市場に合った製品を製造するために、新日本石油では毎年市場の動向に基づいて石油製品の生産計画を調整している。

（P　S　4）

環境保全と品質向上を図るためのコストはどのように回収されているのか？

これらの取り組みによって生産コストは若干引き上げられるが、製品の付加価値も同時に上がるので、かけたコストに見合った収益が得られている。環境面では、環境対策によって生産活動がよりスムーズになったほか、当社の経営理念としての企業の社会的責任も果たすことができている。また、資源をリサイクル利用するためのシステムもしっかり構築されているので、環境への負荷が低減されている。

（P　S　5）

感想

わずか 2 時間の見学で新日本石油の生産と経営のすべてについて理解することは不可能だが、考えさせられることがいくつかあった。

一番印象に残ったのは日本企業の社会的責任に対する認識だ。日本最大の石油企業として、新日本石油は社会的責任をその生産目標の中に盛り込み、様々な環境対策を講じることで社会の信頼に応えようとしていた。具体的には、製油所内の緑化から廃水処理、廃棄物の再利用にいたるまで、できる限り環境にマイナス影響を与えないような取り組みが行われていたが、これはまさに社会や国に対する責任感の表れだと思う。

また、日本についての単純な印象と言えば、やはり街の清潔さときれいな空気ということになるが、日本にも多くの大手企業や大きな工場があるのに、なぜ環境がこれほどまでに美しく保たれているのか‥‥。それはおそらく利益を追求するばかりでなく、社会貢献もしなければならないという責任感が企業にあるからだろうと思う。

中国は今、経済の高度成長の真っ只中にあり、一部企業の利益一辺倒の事業運営により、中国の環境負荷が急激に悪化し、今後の持続的な発展に支障をきたすほどになっている。中国はこの点を反省しなければならないと思う。日本も経済成長の初期には、今の中国のようにいろいろな問題があったが、日本人は今ではそれらを良い教訓にしている。中国の企業や工場も隣国の日本を手本にし、この問題を真剣に受け止める必要があるように思う。そうすることによって、中国も先進的な工業と環境の調和のとれた発展を遂げることができるようになるのだと思う。

NEC を訪ねて

南開大学

2007 年 11 月 29 日、今日は東京の NEC を訪問した。この世界有数の電器メーカーの見学によって多くのことが学べると思った。

NEC に着くと、担当者の方からまず NEC の沿革、その発展の歴史や業務等に関する全体的な説明があり、その後 NEC の中国における発展の歴史と現状についての紹介が重点的に行われた。そして NEC の中国本土における発展が、天津から始まったことを知ったとき、天津の南開大学の学生として格別な親近感を覚えた。

NEC の中国本土における発展の軌跡を見ると、多国籍企業がどのように海外でその市場を開拓していくかがはっきり見て取れる。つまり、まずある地区に子会社を設立し、この子会社を通じて得た情報によってその市場の将来性を分析し、現地市場の特徴と合わせつつ、さらに市場ニーズに合った製品を開発していく。その後、子会社を次々に設立してより多くの地域市場への融合を目指すと同時に、技術を持った人材を吸い上げ、業務分野を開拓しながら社会効益に貢献していくことで、多国籍企業が社会に認知されていくというプロセスだ。1980 年代に NEC が初めて中国本土への進出を果たした時には、わずか 1 社しかなかった子会社が、今では数十社の子会社を持つまでに発展しているが、こうした成功モデルは、中国の民族産業にも大いに学ぶべき点があるように思う。後続の工業新興国としての中国が先進国との格差を縮めるためには、こうした典型的な多国籍企業の成功の秘訣を吸収することが重要で、そうした成功事例に自身の特徴と市場情勢を合わせて、一歩づつ手順を踏んで「走出去（海外進出)」を果たしていくことが求められている。

講義室から出ると、私たちは 3 組に分かれ、それぞれ別々のルートで NEC の電子製品分野の成果を見学することになった。私たちの組はまず NEC が開発したロボット「PaPeRo（パペロ)」を見学した。本当に可愛らしいロボットだった！　女子学生たちはそのあまりの可愛らしさに思わずキスしそうになっていた。それくらいロボットの形が可愛らしかった！　担当者の話によると、このロボットは家庭用のもので、赤ちゃんと遊んだり、テレビのチャンネルを換えたり、家事を手伝ったりすることができるということだった。今はまだ本物の人間とは比べようがないが、科学技術はますます人々の生活を便利にする方向に進んでいるので、今はできないことでも、いつかは必ずできるようになるということを強く感じた。

可愛らしいロボットを見た後は、NEC の電子盗難防止システムと電子識別システムを順次見学した。これらの電子製品分野の成果は、人々の生活レベルを大幅に引き上げ、ときには生活そのものを変えてしまうこともある。こうした科学技術の成果を目の当たりにし、私たちは驚きを隠せなかった。人は科学技術が自分たちの生活を変えたり、それに衝撃を与えるようなことを直に感じたときは、目に見えない力が一人ひとり心の最も深い部分に作用するのかもしれない。

私が言いたいたのは、「科学技術が世界を変え、科学技術が人類の社会を変える」ということであって、私たちが NEC で見たものは、まさにこうした科学技術の成果であり、100 年前の世界と比べまったく想像もできないような世界だった。科学技術の一つひとつの進歩は、私たちの生活や世界を大きくを変え、社会を変革し、ひいては人間そのものを変え

てしまうこともある。世界は変わった。世界は小さくなった。今は中国から日本までたったの 3 時間で来ることができるが、昔は少なくとも数日、或いはもっと長い時間かけて往来していた。また、逆に世界は大きくなったとも言える。100 年前に外国に行くのは大変なことで、交通手段や情報のなさが大きな問題としてあった。ところが、今は家でキーボードをたたくだけで行きたい場所の情報をすぐに集めることができるし、それは月や宇宙についても同じことが言える。社会が法制化、民主化、道徳化の方向に向かっている時には、科学技術がもたらす変革が最も感じにくくなるのかもしれないが、たとえそうであったにしても、より多くのより強力な電子記録、電子追跡、電子識別、電子分析などのハイテク製品を持つことで、社会秩序の監視と保護という分野に変革がもたらされ、科学技術の力によって社会がより透明で管理しやすいものとなり、社会は今、静かに画期的な変化を遂げようとしている。なお、これはなかなか気づきにくいことだが、人類自身にも大きな変化が起こりつつある。哲学ではそれを異化と呼ぶが（これはマルクスの労働概念の異化から引用したものだが)、確かに、人々はキーボードをたたき、マウスをクリックすることにますます慣れ、今や誰も紙にペンを走らせるときの微かな摩擦によって生まれる手の心地よい感覚を味わおうなどとは思わないようになっている。人々はコンピュータの前で仕事をし、チャットし、ゲームで遊ぶことに慣れてしまうと、新聞を読むこと、外に出て友達と会うことを忘れてしまう。科学技術によってもたらされる各種指標（健康指標、衛生指標、環境指標など）をますます重視するようになる一方で、自分自身の情操面の発達を軽視するようになる‥‥。私は何も科学技術がもたらすものを否定しようとしているのではない。ただ科学技術は確かに人を、その身体と思想を含めて変えてしまうということが言いたいだけだ。ここで挙げている例はやや消極的なものだが、科学技術はますます人間にやさしいものとなり、今後、人類がどこに向かおうとしているかを教えてくれている。そうした人そのものを尊重するような科学技術を発展させることこそが、科学技術の今後の方向性であるように思われる。

最後に質疑応答があった。私は、NEC は同業他社と比べてどういう強みがあるのかという質問をしてみたが、NEC 側の責任者がそれに熱心に答えてくれた。それによると、NEC の競争上の強みはその網羅的な事業内容にあり、特に電子通信設備と IT ネットワーク面が強いということだった。このように偏りなく事業を発展させてきたことで、NEC の全体的な収益が良くなっているとのことだった。NEC の責任者が私の質問に熱心かつ詳細に答えてくれたことに感謝するが、私にはそれとは少し違う意見がある。このような機会を与えてくれた中国日本商会に感謝すると同時に、ここに未熟ながら私の個人的な意見を述べてみたいと思う。毛沢東主席の言葉に「二つの拳で殴ると、胸元が無防備になる」というのがある。確かに NEC は網羅的な事業内容を背景に、全体的な収益を上げているが、将来的に見た場合、それはかえって不利になるような気がする。通信機器分野の競争では、NEC がモトローラーやノキアに及ばないことは明らかで、また、IT ネットワーク分野ではインテルが強い。現在の NEC の強みは他社の同類製品が市場を完全に占有していないからであり、今以上に同業他社の市場占有が進めば、NEC がその強みを発揮できる空間としていったいどれだけのものが残るというのだろうか。これはなかなか答えにくい問題だと思うが、事業内容を拡げることの代価は、きめ細かさの不足となって返ってくる。もちろん、NEC がこの二つの分野で同業他社に勝つ自信があるというのであれば、私にとって NEC はさらに偉大かつ尊敬に値する企業だということになり、そうした場合は私の未熟な意見は取り下げ、心から NEC のために祝福したいと思う。

NEC の見学は、私たちの日本訪問における重要な活動の一つであり、その中で多くのことを学んだ。その時の感想を文字によってありのままに記録し、次の人のために役立てて

もらえばと思う。

最後にあらためて日中友好協会と中国日本商会からいただいた勉強と交流のための機会に感謝し、日中両国が今後も互いに啓発し合い、友好関係を発展させていくことを願う。

2007 年 12 月 17 日

第 2 回《走近日企、感受日本》訪問記
責任の履行者、業界のトップランナーとしての住友商事

北京大学　房瑶　李月　李鑫

11 月 28 日、日本訪問の 4 日目、最も盛りだくさんのスケジュールの組まれた一日。この日は 2 都市 4 社を訪問することになっていた。そしてこの日の最後の訪問先が住友商事だった。住友商事は疲れた私たちのために会社の紹介や懇親会を開いてくれた。どちらも入念に準備されたもので、大変ありがたかった。会社紹介の中にあった企業精神と社会に対する責任感には衝撃を受け、新しいものの考え方を知ることができた。

理念として謳われている責任意識とリーダー意識

川村部長から住友商事の企業理念について紹介があったが、「信用・確実」、「浮利を追わず」、「時代を先取る進取の精神」その三点が最も印象的だった。

住友商事の経営理念では、商業活動において何よりも大事なことは「信用」だとしている。顧客に対する時は誠意をもって接するだけでなく、顧客のニーズを満たすための専門知識を持ち、顧客の信用を勝ち得るようにしなければならないとしている。市場の一体化が進む昨今においては、誠意と信用こそが企業が生き残るための必須条件であることは間違いないが、現在、発展途上にある中国には、誠意と信用を企業生き残りのための最重要課題としている企業がいったいどれだけあるのだろうか。21 世紀に中国が直面する最大の危機は、誠意と信用に関する危機だと予言する学者もいるが、これはまったく根拠がないというわけではない。こうした危機を解消するための重要な方法は、企業が誠意と信用を自社の利益を守るためだけに使うのではなく、それを一つの責任として捉えることだと思う。夜の住友商事執行取締役との交流会で、「誠意と信用」をどのように捉えるべきかについて訊ねると、「誠意と信用は単に自分の会社に対して言っていることではなく、企業には社会に対し誠意と信用度を高める責任がある」という答えが返ってきたが、この言葉には強い衝撃を受けた。

「浮利を追わず」ということは、住友商事がその商業活動の中で決して違法行為をしないという点に表れている。少しでも違法の疑いがあれば、その利益は放棄するという。こうした発言は、どの企業にもできることではない。中国ではその発展の過程、特に改革開放の初期に暴利を得た個人や急成長を遂げた企業が出現したが、その多くが法律すれすれのことを行っていた。中国の法整備はまだ不十分だが、こうした中で善良な企業市民としてまず行うべきは法律の遵守であるように思う。そして法によって国を治めることこそが、そうする上での保障となる。(P1)

「時代を先取る進取の精神」とは、ある業界の先頭を走るか、または他人の後をついて行くかということだ。今、中国企業の多くが国際化に取り組んでいるが、国際化というゲームにおいて、中国は常にゲームのルールを守る側であって、決してそれを定める側にはなっていない。もちろん、これは企業の成熟度や国際市場に参入した時期とも大きく関係

しており、その意味で中国はまだ勃興期にあると言えるが、それでも以下のような意識を持たなければならないように思う。つまり時代をリードし、時代の変化に対応し続けなければ、企業の成長はあり得ないという意識だ。住友商事にそれを学び、啓発を受けることができるように思えた。

グローバル化におけるコア競争力の確立

経済のグローバル化が 21 世紀を貫くメインテーマになっている。こうした背景の下、今回の交流では、住友商事が日本のトップクラスの総合商社としてどのようにそのコア競争力をつけ、効率よく世界市場の開拓を進めているのかという点に注目した。

中国部部長の川村さんによる住友商事全体に関する紹介では、以下のことが重点的に紹介された。即ち、900 の支社を持ち、年間売上高 7300 億元、金属、自動車、施工機械、化学品、電子製品、媒体、情報産業、資源、エネルギーを主な事業内容とする総合型商社として、常に新業務の開拓に努めている。子会社を発展させるための大原則は、会社の経営主旨（1891 年制定)、経営理念、行動規範を守り、社員の価値観を変えないということで、こうした企業に長く伝わる最も基本となる理念を維持してこそ、グローバル化の波の中でも常に企業を大きくすることができ、コア競争力を培うことができるようになる。そしてこのように企業理念を生産と実践におけるコア競争力に転換させるのが、即ち「総合力」だということになる。こうした総合力は狭義のそれに限定されるものではなく、長年にわたる事業活動の中で積み上げられた「商業的基盤」と多様化された「機能」で構成されている。その商業基盤とは長い時間をかけて蓄積されたものであり、具体的には住友商事の「信頼」、世界を網羅するネットワーク、世界各国 10 万社のパートナーとの間に構築された「国際パートナーシップ」、多彩かつ優秀な人材を中心とする「知的財産」などである。また、この「商業的基盤」には「リスク管理能力」、「ビジネスチャンス創出能力」、「情報収集分析能力」、「IT 技術の応用能力」「金融サービス提供能力」など「機能」も含まれる。そして商業基盤と機能を有機的に結合させることで顧客の多様なニーズに対応し、新しい価値を創出し、「総合力」を存分に発揮することこそが、住友商事 400 年の輝かしい軌跡の原動力になっている。

一方、中国の工商業はどうかというと、世界を網羅した商業ネットワークを持ち、総合的なサービス提供力があり、かつ歴史のある大型総合企業はまだ誕生していない。中国企業が大きくなるためには、まずは小さいことから始めるべきだと思う。まさに住友商事が提唱するように「戦略の底辺化」と「底辺の戦略化」を図り、会社内部のガバナンスを重視しなければならない。つまり「経営効率の向上」、「経営の健全性の維持」、「経営の透明性の確保」だ。中国の WTO 加盟時の約束事項が実施されるにつれ、中国はさらに過酷な国際競争にさらされることになる。いつもは平静にこうしたことを考えていたが、今回の住友商事への会社訪問によって、それが切実なものとして迫ってきた。日本との競争を例にとると、日本のどの大手商社にも確固とした企業文化があり、忠実な社員がいて、縦・横双方向の強い統合能力がある。一方、中国企業は、その多くが一業界の範囲にとどまり、長い時間をかけて形成されてきた企業理念というものもなければ、業界を超えた横方向の統合メカニズムも持ち合わせていない。ただ政策的な保護と相対的に廉価な労働力によって成長してきたにすぎないのだ。グローバル化が加速する中、中国企業は早急に成熟する

ことが求められているが、その最も直接的な手段が様々な交流を持ち、海外の先進的な管理モデルと経営理念を学ぶことだと思う。

私たちが 5 時間にわたる住友商事への訪問で見聞したこと、解ったことは、通り一遍の感慨と知識でしかないが、最も大事なことは極めてシンプルなことであることが多い。短い時間ではあったが、私たちは住友商事のグローバル化におけるコア競争力を理解することができたように思う。グローバル化の中でも変わることのない企業理念、加えて多岐にわたる企業戦略が、ビジネスの場における無敵の組み合わせとしてその力を見せてくれている。

環境保護戦線上の先駆者として

人類の経済活動が拡大するにつれ、自然および地球環境への負荷が高まり、様々な環境問題を引き起こしている。こうした各種の環境問題を放置し、その解決に取り組まなければ、人類は滅亡の危機に瀕すると言っても過言ではない。1960 年代の日本は、ちょうど今の中国と同じように、高度成長の中で水俣病や大気汚染による喘息などの公害病が引き起こされ、深刻な環境問題に直面していた。(P2)

幸いにも、当時の公害病は環境との因果関係がはっきりとしていたために、それに合った対策が講じられ、相応の成果を挙げることができた。ところが、今、人類が直面している環境問題は波及範囲が広いばかりでなく、互いに連鎖し合ったかなり複雑なものになっている。こうした環境問題は、一部の国と地域の努力だけではもはや解決できなくなっている。

住友商事は環境問題を地球全体に関わるものとして捉えると同時に、次の世代にも影響を及ぼす長期的な問題として捉えている。住友商事はそれを世界中の人が参加し、解決していかなければならない問題として考えている。

住友は銅の採掘と製錬を主力事業として発展してきた。四国地方の別子では銅の採掘と精錬に従事していた。別子銅山は元々周囲を緑の樹木が一面に生い茂る豊かな山々囲まれていたが、木を伐採して燃料にしていたために、すっかり禿山になってしまった。

今からおよそ 100 年前、後に総理事となり住友発展の基礎を築いた伊庭貞剛が別子銅山に派遣され、その責任者となった。伊庭は破壊された自然を目の当たりにして心を痛め、約 6 万本の植樹を行った。当時、伊庭は毎年 100 万本の植樹することを決め、別子銅山には再び緑が戻ってきた。これは住友の「事業は自然環境と共にあるべし」とする経営理念に基づき自発的に行われたことである。

また、銅製錬所の排煙による環境汚染を解消するため、伊庭は銅精錬所を瀬戸内海の四阪島という無人島に移転することを決めた。工場の移転と植樹には莫大な経費がかかったが、伊庭総理事はそれでも自然と地域の共生という理念に基づき、上述のような決定を下している。

総合商社である住友商事は大量のエネルギーを消費し、商品を製造するメーカーとは違い、環境への負荷がそれほど大きいわけではないが、だからといって、環境問題を軽視することはなく、逆に存分にその強みを生かして環境問題に積極的に取り組んでいる。

明文化された環境に対応するための基本理念と基本方針において、住友商事が根源的に寄って立つところは、健全な事業活動を通して環境保全に貢献するという点である。住友

商事が行っている事業には環境関連の分野もあり、常に環境負荷の削減に最善を尽くし、環境改善効果の向上に努めている。住友グループは電気消費量の削減、省エネ、ゴミの減量などの消極的な防御的措置を講じるだけでなく、自身の主力事業としても積極的に環境改善に取り組んでいる。

今年の年初現在、日本は 22000 件の ISO140001 認証を取得し、世界でも認証最多国になっている。住友商事は 1999 年に ISO14001 認証を取得して現在に至る。日常業務は ISO14001 の管理要求に則った環境管理システムを定め、環境に対応するための計画を策定して実行している。

また、住友商事グループは総合商社として、世界中でさまざまな商業貿易、投資、事業活動を行っているが、環境プロジェクトという位置づけのものが少なくない。地球温暖化の防止面では、京都メカニズムを構築し、中国や世界各地で地球温暖化防止のために排出権プロジェクトを進めている。またエネルギー分野では、地球への負荷の小さい太陽光発電、風力発電、地熱発電、生物発電などの再生可能エネルギー事業を展開している。同時にバイオ技術を使ったボイラーなどの環境保護型設備の販売に力を入れている。このほかにもペットボトルの回収・再生事業や古紙回収再利用事業を開拓し、ペットボトルを繊維に加工して絨毯を編むという資源再利用事業などに取り組んでいる。

また、生態保護事業面の取り組みもある。森林資源の保護と同時に、木材事業を展開している。ロシア極東地域最大の木材加工企業であるチェルネイレス（TERNEYLES）に投資し、同社の大株主としてロシア極東森林地帯における持続的に森林開発を行う権利を取得している。また渡り鳥の生育に影響のないコーヒー園でコーヒーの有機栽培を行い、それを日本のコーヒーメーカーへ販売しているが、この事業は、米国スミソニアン財団から「鳥類にやさしいコーヒー」、「鳥類と共生するコーヒー」の認証を受けている。

中国でも再生可能エネルギー事業、環境型車両の製造と販売に関する合弁プロジェクトを進め、中国の環境保全事業に貢献している。

住友グループは経済と環境の関係は相対立するものではなく、共存が可能だと考える。逆説的に言えば、環境保護を省みない企業はその社会的責任を履行していないことに等しく、持続的な成長が不可能となり、最終的に社会から排除されるとしている。

長い歴史の中で住友は常に自然との共生のための努力を続けてきた。住友商事は住友グループの一員としてその環境保護という遺伝子を受け継ぎ、それを次世代に伝えるという大きな責任を担っている。

わずか 4 時間の短い訪問だったが、国際的な一流企業の一端を垣間見たような気がする。責任の履行者、国際事業のトップランナーとしての住友を訪問して本当に多くのことを考え、学ぶことができた。

第 2 回中国大学生《走近日企、感受日本》訪問記
21 世紀の最も貴重な資源は人材である

北京工業大学学生代表

11 月 30 日（金）は中国大学生《走近日企、感受日本》訪日団日本訪問 5 日目で、私たちは千代田区にあるみずほコーポレート銀行東京本店に正午近くに到着した。同行の職員と昼食を共にした後、ディーリングルームを見学した。みずほコーポレート銀行は世界最大の金融グループの一つである「みずほフィナンシャルグループ」の一員で、大手企業、金融機関、海外の重要企業を主な顧客としている。2002 年 4 月、バブル崩壊後の低迷を続ける日本の金融業界において、第一勧業銀行、富士銀行、日本興業銀行の三行が分割および合併によってみずほコーポレート銀行とみずほ銀行に再編された。「みずほ」というは「実る稲」という意味であり、「みずほの国」とは豊かな国を指し、日本の美称にもなっている。

ディーリングルームで最も印象深かったことは、緊張した面持ちで忙しそうに働いていた行員の姿だった。ディーリングルームは見渡せないほど広い部屋で、接客コーナーにはたくさんの机が並び、机と机の間にはしきりがなく、部門と部門の間も狭い通路で仕切られているだけだった。どの行員も忙しそうに電話をかけていた。行員の前には 4、5 台のコンピュータが置かれ、いつでも市場の動向がチェックできるようになっていた。ディーリングルームは異常なほど騒がしく、窓がないこともあり、ことさら圧迫感を感じたのかもしれない。これは古いディーリングルームを改築しないでそのまま使っているために、狭すぎるとも言える労働環境になっているが、新しいディーリングルームはこうではないということだった。行員の話しによれば、こういう狭い環境も悪いことばかりでなく、しきりが無いので行員同士の意思疎通が簡単だということだった。

次に、みずほ奨励基金、みずほ基金、みずほ金融研修コースという三つの部分からなる人材戦略が印象深かった。みずほ奨励基金は外資系企業では初めて中国の高校に設けられた奨学金制度であり、中国人民大学付属高校、北京大学付属高校、清華大学付属高校にそれぞれ設けられている。みずほ基金（現在名「対外経済貿易大学みずほ基金」）はみずほ銀行が中国人民銀行傘下の旧金融学院に設置したもので、同校の学生を対象に金融制度や世界経済の動向に関する金融講座などを開設している。なお、みずほ金融研修コースでは、毎年約 10 名から 15 名の中国の政府機関、金融機関、国有企業の関係者を日本に招いて研修を行っている。

三行合併の際は大規模なリストラは行わずに、ごく少数の高年齢の行員を 5 倍の退職金を払っては解雇するという方法が採られた。大部分の行員が取引先に転職したり、銀行にそのまま残ることになったが、取引先に転職した行員に対しても一定の補償金が支払われている。

みずほコーポレート銀行との昼食会では、人材に対する考え方とその位置づけについて理解することができた。銀行の責任者は「人材はそのままでは使えず、育成しなければなら

ない。会社への帰属意識や企業の価値観も時間をかけて培っていかなければならない」と言う。日本企業の人の使い方やその育成・養成における造詣の深さや、日本企業が調和のとれた安定した企業風土と企業文化を育てていくことで、その競争力を高めていることがよく分かった。

多くの日本企業で終身雇用制を実施していることがその何よりの証拠だ。終身雇用制は日本企業特有の雇用制度だが、いわゆる終身雇用制とは各種学校を卒業した求職者が、一旦、企業に採用され後は退職するまでその企業で働き続けることをいう。

日本では、終身雇用制によって経営者と従業員間の長期にわたる安定した関係が可能になり、長期化した双方の行為が企業の優れた生存条件として、その厳しい市場競争の中で発揮されることになる。

日本の大手企業は、その人材蓄積制度によって従業員と企業の関係を良好に保っているという側面がある。企業が成長するか否かは人材によって決まり、人材の育成と開発には長期的な蓄積が必要となるが、終身雇用制はこの面で重要な役割を果たしていると言える。終身雇用制の下では、従業員の学歴が一般的に大卒・短大卒と高く、これが人材の開発と管理をする上での良い基礎になっている。なお、終身雇用制については、以下のようなことが言える。第一は時間的なことであるが、人材の育成には一貫性と長期性が必要で、制度面から人材の蓄積を保障している。第二に技能と能力の育成という点から見て、人材育成には企業の各部門における訓練が必要になるが、日本企業には一般的に内部「職場異動制」があり、従業員が各部門間で異動し、様々な業務経験を積んだ全天候型の「業務に精通した人材」が蓄積できるようになっている。これは被雇用者のそれぞれ異なる技能と管理能力の全方位的蓄積だと言える。第三に日本企業が人的資源の開発で重視している点は、人的資源の全体としての優位性を発揮するということであり、技能や能力の向上を一握りのエリートだけに頼るということはせずに、資質の高い従業員集団の育成に努めている。

戦後、日本はその特有の企業精神（団結精神、企業の和を個人の成果や犠牲よりも優先させる）によって廃墟の中から立ち上がり、飛躍的な経済成長を遂げ、世界でもよく知られた成功事例として認識されているが、今日ではこうした精神に頼りすぎたことが、逆にその持続的な発展を阻害する要因にもなっている。

現在、日本では、あらゆる分野に見られる行政干渉、家長式企業管理、日本国民が子どもの頃から慣らされている集団主義的価値観によって社会の貧富の差は多少縮まったが、同時に企業のイノベーションを支える人材と一般的従業員との境界線が非常に曖昧になってしまっている。こうした境界線の曖昧さは世界の工業先進国でもあまり例のないことである。現在、世界経済はその活力を維持するために、個人の能動性と創造性をますます重視するようになってきている。日本がこれからもイノベーションのための人材の主観的能動性に関する育成を重視しないということであれば、おそらく日本は人材流出という問題に直面することになるだろう。

2.日本の企業文化の中国における意義

今、世界は情報化によってその経済と社会に大きな変化が起こり、中国企業もその大変

革の只中にある。特にWTO加盟後は、コア競争力の増強という面で企業文化が果たす役割について注目され始めている。今、日本の企業文化について研究することの目的は、中国企業が日本企業の成功の秘訣を参考にしつつ、中国的特色と時代的特徴を合わせ持った企業文化を創造することにある。

(1)「理性的制度」と中国の優れた伝統文化との融合を重視する

企業管理については、よく知られている通り、その考え方について長い間論議されてきている。つまり、管理の核心とは何かという問題であるが、この問題は二つの視点から捉えることができる。一つは制度化された管理を強調して、企業の価値観を従業員の行為に強いることである。もう一つは文化的視点から従業員の心、態度、興味に影響を及ぼし、ソフトとしての文化的環境の中で従業員の考え方を抜本的に変え、現代的な管理手法に適応させていこうとするものである。

日本企業のそれはこの二つの方式を合わせたものである。どの企業文化にも一定の規則があるが、どの企業の成長もその国独自の文化を基盤としている。したがって、企業文化を構築するに当たっては、自国の伝統文化と現代的な「理性的制度」が対峙するようなことがあってはならならず、むしろ互いに補完し合うようなものでなければならない。

目下の中国の企業文化について言えば、外国の先進的管理に関する考え方を懸命に学び、それを中国文化という土壌に根づかせ、現代的企業文化において中国的特色を具現化していくことが求められている。

(2)収益の原則と人文精神の育成との結合を重視する

企業文化の構築においては、人文精神の育成がその核心的内容になる。人の尊厳や価値観など、人文精神が意味する内容は多様だ。科学技術を重視するあまり人文精神を軽視し、収益を重視するあまり道徳を軽視し、科学的精神を重視するあまり人文精神を軽視するようなことがあれば、社会の調和が崩れ、企業の健全な成長に必要な社会環境が欠如することになるが、これは日本企業の成長プロセスでも証明されている。

WTO加盟以降、企業と中の政府が先ず直面したのが、競争のグローバル化という問題であり、市場経済の秩序を構築していく上で明らかになったものが、企業の悪性競争という問題であった。商業道徳を軽んじ、人を陥れたり騙したりすることが横行し、信用危機や拝金主義が深刻の度を深め、社会全体の信用の低下を招いている。企業に道徳観、人文精神、規律や秩序の尊重、勤勉さが無ければ、その生存および成長のための内部/外部的環境が悪化することは必至である。

(3)企業の発展と国益の結合を重視し、企業の社会的責任感を醸成する

当然のことながら、この遠大な歴史的使命を果たすに当たっての企業家の責任は重大である。時代の趨勢に適応していくために、自己の使命と責任をよく認識し、企業の利益と国益を結合させ、自らを発展させつつ社会および国に貢献することを企業経営の理念の核心とすることが求められている。

野菜くらぶ

北京航空航天大学

1.見学と感想

大型バスに揺られ少し眠った後に目を覚ますと、既に喧騒の東京市中を離れ、静かな群馬県の農村に向かっていた。紅葉に覆われた山間の渓流と豊かな水の流れる川を過ぎた。私たちは矢も盾もたまらずに車から飛び降り、大自然を満喫した。

土の匂いに野菜のすがすがしい香りが入り混じり、足元では踏みつけられた枯れ草が「カサカサ」という乾いた音をたてていた。道に沿って小さな坂を上がり、周りを一望すると、整然とした樹林と色づいた田園が目の前に広がり、遠くに見える山は、画仙紙に描いた水墨画の滲みのように濃淡が融け合い、山頂の雪が雲に霞んでいた。こんなに美しい風景の中で仕事のできる人たちが何とも羨ましい気がした。坂の上で野菜くらぶの説明係りの竹内潜さんと通訳の呉さんに会った。竹内潜さんはまだ 20 歳台の若者で、スキー選手でもあるので、農作業のない時はチームに参加してトレーニングに励んでいるという。呉さんは農学博士の学歴を持つ中国人で、私たちは彼のことを「呉博士」と呼んだ。

彼たちの案内で私たちは先ずトマトの実験用ハウスに入った。外の澄んだ冷たい空気に比べ、ハウスの中はポカポカと暖かく、ハウス内の温度は一定に保たれていた。人の背丈よりも高く成長したトマトの株の傍に立って、私たちは竹内潜さんの説明に従ってハウスの状況を理解していった。このハウスでは三つの場所から取って来た土でそれぞれトマトを栽培し、地元農家はどの土壌がよりトマトの生長に適するかを見て栽培場所を選び、栽培面積を徐々に拡大していくという。竹内潜さんは天井板から吊り下げられた温度センサーと土中に埋められた水と栄養液を送るための配管も見せてくれた。ハウス内では播種から灌水にいたるまで、また施肥から温度調節にいたるまですべてがコンピュータ制御で、人は決まった時間にボタンを押すだけでいいという説明があった。ハウスを出た私たちは、栽培方法は確かに先進的なことは分かったが、こうした方法で栽培された野菜が果たして美味しいのかどうか疑問に思ったが、心配することはなかった。大きなカゴ一杯のトマトが用意されており、それを食べた人たちの笑顔を見れば、ここのトマトが美味しいことがすぐに分かった。

次に、またバスに乗って数キロ離れた野菜の集荷所を訪ねた。暖かいトマトのハウスとは違って、倉庫内の冬の外気温より寒く感じた。震えながら倉庫から出て、そこに設置されていたレストランに入り、日本式の弁当を食べた後、沢浦社長から野菜くらぶの概況についての紹介があった。

集荷所を後にする時、暖かい陽光が雲間から射してきた。次にアスパラガス畑を見学した。そこでアディダスのスポーツキャップをかぶったもう一人の人に会った。彼は野菜くらぶ最も早期の創設者の一人だった。アスパラガスの栽培方法、成長サイクル、供給ルートについての詳細な説明のほか、野菜くらぶが地元のサラリーマンを兼業作業員として募集し、出勤前に野菜の摘み採りや都市部への輸送を助けもらうということを通じて、地元のマンパワーを十分かつ効率的に活用しているとの紹介があった。

見学を終え、日本の農業技術とあらゆる場面に環境意識が反映されていることに強い感慨を覚えた。ハウスでは完全に「緑色」（エコ志向）の栽培、灌水、摘み採りが行われ、すべてのプロセスでできるだけ農薬や化学肥料を使わないか、または使う量を減らしている

という。そうするとコストが上がる反面、収益は下がり、ひどい時にはコスト割れになる場合もあるが、野菜くらぶでは常に「緑色」生産が行われている。更に重要なことは、ここで働く青年たちが都会の喧騒と便利さを捨てて自ら進んで農業に身を投じているという点である。しかも彼たちによって新しい生産方式と近代的設備がもたらされ、灌水や温度調節などの農業生産の基本プロセスでオートメーション化を実現し、人力を節約し、生産効率を高めているのだ。発展途上国の中国にとって、これらすべてが参考になると思った。目下、経済が急成長を遂げる中国には強大な農業基盤が必要だが、広大な土地がありながら、その使用が不合理で、しかも一部の地域ではまだ焼き畑農業行われており、土地の利用率は低い。こうした状況の中で、中国は工業と非農業産業に十分な生産材料と生活物資の供給がなされていない。今、中国では知識を農村に広め、知識を持った青年が農業に身を投じ、先進的な生産方式や機械を農村に持ち込むことが求められている。中国の農業改革のスピードが加速され、土地利用の合理性と生産効率が向上すれば、中国の近代化と工業化に確固たる基盤を提供することになり、国民経済の急成長がいっそう促されることになる。経済成長の過程では効率を最優先して周囲の環境を破壊するという状況は絶対に避けなければならない。持続可能な発展を学び、大気・水・土壌などの基本的な生産基盤と生活基盤をしっかり護り、後代のために良好な生産と生活のための環境を創出していかなければならない。

2.野菜くらぶ見学時の質問

Q：各種生産用水は循環利用が難しいために、農業用水の利用率は工業用水のそれより遥かに低く、しかも化学肥料による土壌と水源汚染などの問題があるが、野菜くらぶはこうした問題をどのように対処しているか？

A：用水量を厳しくコントロールしている。しかも動態制御によって作物が生長している土壌にどういった種類の元素が過剰になっているか、また必要な元素は何か、毎日検査・測定を行い、必要に応じて安全で無害な有機肥料、緑肥、堆肥を施している。化学肥料は原則使わないことになっている。病虫害が発生した時は、先ず無毒無害な微生物製剤を使うようにしている。こうして有機栽培作物としての品質を保証し、環境汚染を極力減らしている。

Q：現在、中国では国が数千年にわたって実施してきた農業税が免除されるようになっているが、日本政府はこうした先進的な生産方式に対し何か優遇措置を設けているか？　野菜くらぶの発展にとって最大のボトルネックは何か？

A：国はわが社についてかなり関心を払い、支援をしてくれている。例えば各地の土壌別の生産効率を見る実験農地の 50%の資金が政府から援助されたものである。また、税制上の優遇措置もいくつかある。発展を阻害している要因としては二つが挙げられる。それは科学技術の進歩が需要に追いつかないことと人材不足だ。

Q：野菜くらぶの生産および経営方式の主な特徴は何か？

A：パンフレットの中にもあるが、先ず、当社は新方式のハイテク管理による、研究センターを集積させた農業生産会社であり、株式参入という形で農家を組織している。様々な作物の生長環境に対応し、様々な地域の様々な気候特性を利用して栽培を行っている。例えば、夏季には海抜の高い群馬県を主な生産基地として生産を行い、気温の低い冬季

は主に海抜の低い静岡県で生産を行っている。こうした生産方式によって生産を安定させ、生産契約を通じて農家の収入を安定させている。
また、日本国内の農業人口の平均年齢は 60 歳を超えているが、当社の従業員の平均年齢は 43 歳で、正に働き盛りの人たちだ。20 歳台の若者もいて、新鮮な活力になっている。なお、当社は通年供給メカニズムの確立を発展目標として掲げており、現在、巨額を投じて冷蔵倉庫、冷蔵車とパッケージセンターの建設を行っている。顧客が一年 365 日、いつでも新鮮な野菜を予約購入できるようにすることが私たちの目標だ。

Q：輪作によって単位生産量は高くなるが、土地利用率は下がるという問題があるが、これについてはどうか？
A：（笑）土地は強度の高い生産を行った後は必ず休養が必要で、土壌を培養することが必要になる。それはちょうど人が激しい運動をした後に休まなければならないのと同じことだ。

Q：遺伝子組み換え作物についてどう考えるか？
A：遺伝子組み換え作物が人体に対し完全に害がないという確実な証明がまだなされていない。したがって、今は遺伝子組み換え作物の生産はしていない。

3.重点

⑴新技術の活用：ハウスが完全にコンピュータ化及び自動化されている。微生物製剤の利用。全ての輸送過程で低温環境による鮮度保持している。
⑵生産計画の策定：前年に翌年の週単位生産量を決める精確な生産計画を策定している。
⑶若者の参画：20 歳台の若い農業生産従事者がいる。役員の話では、比較的高い収入が望めるために、ますます多くの若者が野菜くらぶへの参画を希望しているという。
⑷「ウィンウィン方式」で作物を収穫：農繁期には会社勤めの農家に出勤前の時間を利用して、作物の摘み採りを手伝ってもらい、作物の定時出荷を保証し、兼業農家の収入アップを図っている。

何よりも安全第一
ANA 機体メンテナンスセンター訪問記

北京郵電大学

航空安全は飛行機を利用する顧客一人ひとりの最大の関心事であり、それは航空会社にとっても自己存続のための基盤となる。《走近日企、感受日本》中国大学生訪日代表団は全日空の見学を通じて、当社が全世界に路線を拡大し、サービスの質を向上させる一方で、安全確保を会社を発展させるための原点として位置づけ、その安全性を基礎に世界有数の航空会社になったことを知った。

今次訪日代表団の最後の見学先として ANA 機体メンテナンスセンターを訪れた。ここは ANA の子会社で、主に飛行機の定期点検・保守・整備を行っている。機体メンテナンスセンターの理念は、良い整備保障体制と保障手段こそが航空会社の正常運航を確実なものにし、利用者のために安全・定刻・快適な運航を実現し、より良い企業に成長させるというものであった。

メンテナンスセンターは事務系の仕事以外に、工場整備・ライン整備・エンジン整備・装備品整備の四つの部分に分かれている。整備体制も他社のそれとは異なり、本社整備部門、グループのその他の整備会社 9 社、社外の整備専門会社といった三つの部分から構成されている。メンテナンスセンターは機材と運航品質の向上、コスト削減、業務（仕様、機材計画）ニーズへの迅速な対応、グループ整備部門全体に対する管理、事務部門の人材育成を図ることをその使命としている。

アウトソーシング面では、中国アモイの TAECO 社、シンガポールの SASCO 社に機体整備を、スターアライアンス加盟航空会社にライン整備をそれぞれ委託しているほか、General Electric 社と共同でエンジン部品修理点検会社を設立している。

整備作業には特別作業と通常作業があるが、特別作業とは技術的指示に従い、改良型ブレーキに交換したり、シート配置を変更したりすることをいう。通常作業にはイレギュラー作業とレギュラー作業があり、イレギュラー作業とは突発的な状況への対応を指す。例えば、運航中のトラブルへの対応、寒冷時の処理、飛行機と鳥が衝突した場合の対応などが挙げられる。なお、レギュラー作業が通常作業の中でも最も肝心な作業になる。レギュラー作業には出発前点検と定時整備があるが、出発前点検は更に経過点検・出発点検・到着点検などに分かれ、飛行機の正常運航を確保するための点検が行われている。また、レギュラー作業の中で最も大きな比重を占めているのが定時整備で、これはさらに A 整備と C 整備に分けられる*（訳注：中国語の原稿には A 整備、C 整備と HMV（Heavy Maintenance Visit）が併記されているが、HMV は定時整備と併記されるべきものであって、定時整備に属するものではない）*。定時整備をしっかり行うことによって、ANA の無事故安全運航の記録が生まれ、ANA という世界有数のブランドを確立している。

ANA が最も多く保有している B767 型機を例にとると、飛行機が空港に到着するたびに、次のフライトのために乗務員を確認したり、機体の目視確認を行うことになっている。また、600 飛行時間ごとに行われる A 整備では、最終便で到着した航空機も翌朝までに夜を徹して整備が行われる。6000 飛行時間或いは 18 ヶ月毎に行われる C 整備では、約 10 日間かけて航空機の部品を取り外して本格的な整備を行う。さらに飛行時間 5 年ごとに HMV 作業が行われ、約 1 ヶ月かけて機体の構造的な部分まで点検するほか、防腐塗装などの検

査や保守が行われる。いずれの定時整備も作業マニュアルに従い、一万個弱の部品を一つひとつ厳しくチェックしていくが、それはほんの小さなミスでも取り返しのつかない大惨事になりかねないからだ。飛行時間の管理面では、ANA はコスト削減と利益のために、飛行機を 1 日でも多く、また1回でも多く離着陸させるというような発想はしていない。そうした考え方が往々にして事故につながるということをよく知っているからだ。ANA はきちんと定時整備スケジュール通りに、飛行機をドックに入れ点検・整備することで、飛行機一台一台の絶対的な安全性を保障している。

機体整備技術の面では、機体の全てのシステムと客室および機体全体の整備を担当する GME が 202 名、機体の構造関連の整備を担当する MAM が 100 名、電気・電子系統の整備を担当する EEM の 58 名でそれぞれ整備に当たっているが、実は彼たちこそが「人知れぬヒーロー」なのだ。毎日、夜のとばりが降り、人々が眠りについている時に、飛行機の部品一つひとつを念入りに検査し、翌日の正常な運航を保障してくれているのが彼たちであり、朝から晩まで飛行機の整備に追われ、飛行機を一刻も早く安全な状態、運行できる状態にするのも彼たちなのだ。決してパイロットやキャビンアテンダントのように脚光を浴びることはないが、実は最も尊敬すべき人たちなのだ。彼たちが人々の安全を護り、会社を支えてくれているのだ。

こうした整備担当者は厳しい訓練と選抜を経てようやく一人前の専門技術者になるのだが、原則的にはベーシックマナーコースと基礎コースの訓練を受けた後に G2 資格を取り、さらに 2 年間の定期訓練を受けて G3 資格を取ることになっている。その後、さらに難関の国家試験を経て、一等航空整備士、即ち本当の整備士になるのだが、ここに辿り着くまでに約 8 年の時間を要する。こうした厳しい訓練と選抜制度によってレベルの高い整備員の確保が可能となり、安全飛行が保障されている。

整備担当者がその整備作業の中で、飛行機の設計上の欠陥などを発見した場合は、直ちに航空機メーカーにフィードバックし、改善を求めることになっている。整備作業は単に飛行機のメンテナンスだけでなく、乗客のニーズに応え、航空機メーカーと協力して航空事業を発展させていくという重責も担っているのだ。

幸運なことに、今回は ANA のC整備工場を見学することができた。B767 型機と B737 型機がすでにバラバラに分解され、点検・整備が行われていた。全ての作業がてきぱきと、かつ整然と行われ、誰もが真剣に自分の仕事に取り組んでいた。私たちは作業の邪魔にならないように、遠くからこれらの作業を見ていたが、まさに見ているだけで安心が感じられる仕事ぶりだった。

見学を通じて、ANA の安全重視の姿勢を身近に感じることができた。ANA の言葉を借りて言えば、「安全こそが会社が生きのびるための生命線」だということになる。安全重視、万全な保障体制、確実な実行制度、質の高い整備チームが今の ANA の成功を支えているのだと思った。特に職員のまじめな仕事ぶりが印象的だった。乗客のニーズと会社の発展のために、誰もがまじめに仕事をしていた。こういう企業こそが世界トップレベルの会社になれるのだと思う。安全を保障するための良い体制がない航空会社には良い業績など望むべくもないことだが、ANA は安全を最も根幹をなす理念として位置づけることで、発展をし、利用者一人ひとりに安心感も与え続けている。

2007-12-16

早稲田大学

南開大学

今回の最後の訪問先は楽しみにしていた早稲田大学だった。優秀な日本の大学生とフェイスツーフェイスの交流のできる貴重な機会を得たが、それは今回の訪日全体の総まとめ、或いは一つの昇華の形であった言える。早稲田大学が日本でも有名な私立の総合大学であり、世界でも有数の大学の一つであることは知っていた。早稲田大学の歴史を振り返れば、その田園を思わせる校名の由来は、まさに二束の稲穂の間に「大学」の二文字がデザインされたその校章の図案が示すように、決して繁華な都市に創設されたものでないことを表している。その前身は東京専門学校といった。早稲田大学は「学問の独立を全うし、学問の活用を効し、模範国民を造就する」を建学の本旨としているが、この優れた学風は創設者の大隈重信以来、歴代総長の薫陶と教師や学生たちの奮闘により代々伝えられ、発揚されてきた。

1882 年「学問の独立を全うする」という宣言とともに、明治時代の有名な政治家で自由民権主義者であった大隈重信が、東京郊外の一面の稲田の中に東京専門学校を創設した。当時の国内政治における党派闘争の関係で、大隈重信の立場では自ら学校運営を行うことができなかったために、大隈英磨が総長に就任した。当時は政治経済、法律、理学、英語の 4 つの専攻しかなく、小規模で施設も極めて粗末な学校であった。

1902 年の創立 20 周年を機に正式に早稲田大学と改称された。その後の関東大震災と第二次世界大戦で早稲田大学も深刻な被害を受けたが、粘り強い学校運営が続けられた。

第二次世界大戦終了後、戦時には止められていた新入生の募集が可能になり、規模が大幅に拡大されることになった。新学制の下、早稲田大学は戦後の経済復興のニーズに応えるために、全日制学生の受け入れ規模を拡大すると同時に、夜間や通信教育コースも設けていった。大学院教育も充実し、多くの学部・学科に博士課程が設けられるようになった。学内の機構もそれに応じて拡充され、体育局や国際部を設けて国際交流と留学生の派遣と受け入れを強化していった。また、様々な研究所も次々に設立された。

創立者の大隈重信は先見の明のある教育者で、その学校運営のための原則と精神は現在まで貫かれ、「学問の独創性」、「知識の実用性」、「模範的な日本国民と世界市民の育成」が建学の本旨になっている。

大隈重信が提唱した「在野精神、進取精神、庶民精神」により、早稲田はエリートや指導者だけでなく、多くの実務に長けた人材を養成してきた。

大隈重信の建学に当たっての究極の目標は「世界の早稲田」であった。早稲田大学は早い時期から欧米の学術文化を吸収し、アジア各国に向けてその門戸を開放した。各国の留学生の受け入れでは、日本の大学の中でも常に先頭を歩んできた。

早稲田大学は 100 年余の歴史を経て、今や整備された総合大学となり、5 万人超の学生が 9 つの極めて個性的な学部及び 12 の大学院で学んでいる。学内には近代的な施設だけでな

く、百年来蓄積してきた豊かな人文資源があり、名実ともに日本の「私学の雄」となっている。

早稲田大学の本部キャンパスは東京都都心の新宿にあり、主な学部と運営機構がここに設置されている。その他にも戸山、大久保、所沢、本庄などの 9 キャンパスがある。各キャンパスには関連学部の教育・科研施設が設けられているが、本部キャンパスには大隈講堂、演劇博物館、井深大記念ホール（国際会議場)、新設の総合情報センターなど早稲田大学の歴史と特色を反映した建築物がある。

また、早稲田大学には中央図書館を中心に合計 30 ヵ所の図書館があり、蔵書数約 450 万冊、利用者延べ 180 万人、多くの国宝級の図書も蔵書されている。

なお、早稲田大学は個性を尊重し、「自由な学風」を尊ぶ総合大学であり、世界各地からの異なる肌の色をした、様々な言語を話す多くの留学生に会うことができる。また、森喜朗、小渕、竹下、海部など日本の歴代首相を輩出し、日本の国会には 100 名近くの「稲門会」と呼ばれる同窓会組織がある。企業家では、松下電器やソニーの創立者が名を連ね、上場企業の社長では早稲田大学出身者が最も多く、村上春樹などの有名な作家、芸術家、建築家、マスコミ界の有力者など枚挙にいとまがない。「早稲田大学出身者が日本の世論ツールを掌握している」と言う人さえいる。

こうした古い歴史のある、優れた大学を見学できたことは、私たちにとって本当に嬉しいことであった。早稲田大学に到着後はキャンパスを簡単に見学したが、早稲田大学は周囲の環境によく溶け込んでいた。大学の正門は大きな鉄門があるわけではなく、道路脇に石段が一段あるだけの完全開放型の校門がせいせいした感じで良かった。しかも秋のキャンパスは格別の雰囲気で、一面の落葉と気落ちの良い秋風が大学の洋風建築とマッチし、セピア色の詩情溢れる美しさに包まれていた。特に大隈広場にある大隈講堂は荘厳さと厳粛さに満ちていた。この講堂は創始者の大隈重信を記念して建てられたものだが、その独特な外観が早稲田大学のシンボルになっている。それは伝統的な左右対称ではなく、非対称の形式が採られていた。講堂の脇に時計台があるが、それには個性と自由を強調する意味が込められ、大隈の学問の独立と独創性を探求する精神に呼応したものになっている。なお、周囲の環境に溶け込むように、広場前の大きな通りも講堂の真正面ではなく、斜めになっていた。

キャンパス見学後は、学生たちと「学習と就職」をテーマで交流が行われた。短い時間ではあったが内容の濃い交流で、中国と日本の大学生にはいろいろな面で違っていることが分かった。例えば、日本の大学生の多くは卒業後、すぐに企業に就職することを選択する。中国の学生は学部卒業後に大学院進学を選ぶ傾向にあるが、日本の学生は卒業後すぐに就職し、数年働いた後に大学に戻って大学院で学ぶかどうかを考えるようだ。また大きな相違点としては、日本の大学生の職業選択に当たっての態度が挙げられる。彼らの話によれば、日本の大学生は「人」をその職業選択の際の第一指標とする、つまりその会社の社長がどういう「人」なのかを見ると言う。次に重視するのが個人的な興味と仕事の環境で、最後に給与や報酬の額を考えるということだった。この点は中国の国情と多少違いが

あるように思われた。また、学生生活についても話したが、日本の大学生のほうが独立していて自主性が強く、中国の大学生よりも勉強以外の楽しみが多く、中国が今進めている資質教育により近い教育のような気がした。中国が今行っている教育改革が功を奏すためには、まだ長い期間がかかるように思われる。時間の都合で、中日両国の大学生の勉強と就職についての交流は適当なところで終了したが、次の夕食会でまた自由な雰囲気の中で食事をしながら交流することができた。

その中で最も印象深かったものは早稲田大学の自動図書館だった。彼たちの話によると、日本は地震が多いので、人身の安全を保障するために、国の規定では建物の地下 2 階以下に常時人がいるような設計ができないようになっていることから、早大図書館の地下書庫にはピッキングシステムが採用されており、コンピュータ上で必要な書籍名を入力するだけで、地下書庫のロボットが自動的に本を取り出してくれるという。しかも、この先進技術はまさに目下研究の焦点になっている人工知能だという。まったく初めて聞くことばかりだった。

今年はちょうど早稲田大学の創立 125 周年だが、そもそもこの 125 周年にはもう一つの意味がある。創立者の大隈重信には「人は 125 歳まで生きる」という持説があった。この「人は本来、125 歳までの寿命を有している。適当なる摂生をもってすれば、この天寿をまっとうできる」という理論の根拠は、「生理学者の説によると凡ての動物は成長期の 5 倍の生存力を有するというものである。そこで人間の成熟期をおよそ 25 歳として、その 5 倍、即ち 125 歳まで生きられる」（大隈重信述「人寿百歳以上」から抜粋）。大隈重信のこの「人生 125 歳説」は高く評価され、その当時の雑誌に何度も紹介された。したがって、早稲田大学と大隈重信に関する記念行事においては、この「125」という数字が新時代を代表するものとして重視されている。創立 45 周年の時に建てられた大隈講堂の塔の高さは 125 尺（約 38m）に設計され、1963 年には大隈重信の生誕 125 周年記念活動が行われている。しかも聞くところでは、早稲田大学は創立 125 周年に「第二の建学」を打ち出され、将来を見据えた「国際人を育成するグローバル・ユニバーシティー」という壮大な目標を掲げ、入念な計画を進めているという。創立 100 周年記念の時には、西原春夫総長によって 21 世紀に向けての青写真が打ち出され、国際化・情報化時代に対応した教育及び研究体制が提起され、早稲田大学にとっての「第二の世紀」の幕が開かれたことが宣言された。

2007 年の創立 125 周年では、第二の建学――国際的な大学になるための「第二の世紀宣言」、即ち「地球市民の育成、独創的な先端研究への挑戦、全学を社会のための生涯学習機関として提供すること」が打ち出され、目下、大学側は次のような一連の改革を行っている。即ち、単位制を実施し、柔軟かつ多様な学習方式により活きた学問をする。体育局を設立して全校の体育課程を一元的に管理し、心身の調和のとれた学生を育成する。演劇博物館などの施設を利用し、情操及び芸術面の才能を育成し、学校生活を豊かなものにする。図書館機能を十分に発掘し、それが真に「教室」としての役割を果たすことができるようにする。入学試験制度を改革し、学業が優秀で、全面的に発達した学生を募集する以外に、一芸に秀でた学生を受け入れるようにする。様々なルートからの推薦と試験を統合させた

募集方法により、これまでの「一回の試験で一生が決まる」という方法を改める。それ以外にも、帰国子女、外国人学生、スポーツエリートについても柔軟な受け入れ措置が講じられている。

早稲田大学で私が最も気に入った点は、あの「庶民的」な学風だった。早稲田大学は 100 年余りを経ても、大隈重信の提唱した 3 つの精神――在野精神、進取精神、庶民精神が継承されており、以下のような「開放」措置によって独自のスタイルができている。①教育の開放：縦横にクロスした学習機会を提供し、徐々に専門性を深めていく開放的教育を提唱している。個性を大事にすると同時に、融合と開放が強調されている。2002 年現在、約 1,000 課程で開放教育が行なわれ、すべての学部生が自由に聴講できるようになっている。②キャンパスの開放：早稲田大学には塀が無く、誰でも見学に訪れ、場所を借りて会議まで行うこともできる。隣人を友として仲良くつきあうというのが、早稲田大学が 100 数十年大事にしてきた庶民的スタイルである。同時に早稲田大学の学生もしばしば周辺コミュニティーの各種活動に参加している。③世界に向けた開放：国際的な視野を持った「世界市民」を育成するために、世界的な人材ネットワークを構築している。早稲田大学は毎年海外に各種留学生約 600 名を派遣すると同時に、日本の私立大学としてはトップレベルの約 1,300 名の海外留学生を受け入れている。目下、同校には海外派遣留学生数を全校学生の 30%にするという計画がある。④「東西文明の調和」：これは大隈重信の高い見識によるもう一つの建学理念である。早稲田大学は最も早い時期に欧米の学術文化を吸収し、アジア各国に向けて門戸を開放した大学である。早稲田大学には世界の 14 の国と地域の 87 校から 1,000 人の留学生が来ており、その数は日本の大学の中でも屈指である。それと同時に国際交流活動にも常に積極的に取り組んできた。これまでアインシュタイン、バーナード・ショー、江沢民、クリントン、金泳三などの有名人や国家元首が訪れているが、これらの世界的著名人の来訪により早稲田大学の国際化に向けた教育への取り組みが推進されている。

早稲田大学の学生に中国の印象について尋ねてみたが、彼らの中国観が非常に現実的なものであることに驚かされた。しかも中国についての理解が非常に深く、中国と早稲田大学の交流についても興味深げに話していた。早稲田大学と中国はかなり早い時期から文化交流活動を始めており、1905 年には早稲田大学内に清国留学生部が設置され、最初の年に受け入れた中国留学生は 762 名で、日本の各大学の中で最も多かったという。また、最も忘れられない出来事としては、1999 年に江沢民総書記があの大隈講堂で行った「歴史を鏡とし、未来を切り開こう」という重要な講演があるとも言っていた。現在、早稲田大学は北京大学、復旦大学、南開大学、上海交通大学と学術交流関係を確立している。

ゆっくりと時間が流れ、早稲田大学の訪問も終了の時間が近づいていたが、今回の交流の意義は到底言葉では表わせないと思った。それは中国と日本の一流大学の学生同士によるフェイスツーフェイスの対話であり、双方の学生生活や考え方が理解できたと同時に、おそらく今回の交流は中日両国の将来にとって有益だったのではないかと思う。私たちはいずれも中日両国の将来を支える力であり、こうした交流を通じて相互理解を深め、様々な疑念や誤解を解消することは、中日関係の発展を大きく利するものだと思う。

今回、大変意義のある訪日の機会が得られたことは本当に嬉しいことであり、また微力ながら中日友好のために自分なりに頑張ったつもりだ。最後に早稲田大学の優秀な学生たちに感謝すると同時に、今回のこの貴重な機会をつくってくれた日中経済協会と日本商会に感謝し、中国と日本の友好に関心を寄せる全ての友にお礼を言いたいと思う。

2007 年 12 月 17 日

学生たちの感想文から

学生たちは毎夜、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 2 回訪日を記録した。以下ではその一部を紹介する。

日付：11 月 26 日（月）1 日目
大学名：北京大学
氏名：李鑫
親切だった「神座」の店員
日本での最初の夕食は「神座」のラーメンだった。美味しいラーメンにきちんと片付いた店内が印象に残った。中でも感激したのは親切な店員さんたちだった。温かいラーメンを運んで来てくれた時に、ちょっと頭を下げて謝意を表すと、「はいっ！」と礼儀正しく応じてくれた。
どの店員さんもきびきびと働いていた。彼女たちにとって仕事は楽しいものであって、まったく負担に感じていない様子だった。店員さんたちはひっきりなしにある言葉を声をそろえて言っていた。それがどんな意味かは解らなかったが、彼女たちのハツラツとした楽しげな雰囲気は感じることができた。
何と前向きな生活態度だろうと思った。自立して生活していることの誇りに溢れていた。こうした人生こそが、楽しく意義のある人生かもしれないと思った。親切で前向きな「神座」の店員さんたちを羨ましく思うと同時に、尊敬の念がわいてきた。

日付：11 月 26 日（月）1 日目
大学名：北京工業大学
氏名：劉雷
ゴォーという飛行機の離陸音とともに、私たち《走近日企、感受日本》代表団一行の気分も自ずと高揚してきた。今日から私たちの 10 日間の「日本を感じる」旅が始まるのだ。
3 時間弱のフライトで関西国際空港に着いた。みんな少々疲れた様子だったが、この日は比較的余裕のあるスケジュールになっていた。「神座」（ラーメン店）であの有名な日本のラーメンを味わった後、専用車に乗って宿泊先のホテルに着いた。
今日だけでもいろいろと新しい経験をした。中でも印象的だったことは、日本人の思いやりと緻密さだった。日本人が細部をいかに大事にしているかを実感した。
最初の出来事は次のようなものだった。ホテルまで旅行社が用意してくれた大型観光バスに乗ったが、すべての座席の前にゴミ袋が備え付けられていた。これは中国のバスとは大きな違いだった。ゴミ袋があれば、便利で衛生的だし、周りを汚すこともない。これは取るに足りない小さい事かもしれないが、ゴミ袋を見て、日本人は何をするにも、どうしたら「人にやさしく」なるかをまず考えるのだということが分かった。
次は「神座」ラーメン店で食事をしていた時に目にした子供用の定食だ。食器がすべてアニメのキャラクターで作られているだけでなく、小さなオモチャのプレゼントまで付いていた。子供の嬉しそうな表情が忘れられない。中国でもマクドナルドやケンタッキーなど、こうしたサービスをしているところもあるが、ほとんどのレストランは客層や対象を分けたサービスはしていない。この点は大いに学ぶべきだと思った。
三番目は、日本のいたる所に置かれている自動販売機についてだ。機械を使えば人件費

は少なくてすむし、消費者にとっても非常に便利だ。消費者はいつでも思いたった時に、ものを買うことができるので、自ずと消費も増える。このような「人にやさしい」サービスによってもたらされる販売者と消費者のウィンウィンの関係は素晴らしいと思った。

今や、中国の大都市はハード面では決して日本にひけをとらない。場合によっては、日本よりも進んでいるようなところもあるが（中国には後発国としての強みがある)、ソフト面（人文環境）ではまだまだ及ばないところがあるように思う。僕たちはこのことをもっと真剣に考えなければならないと思った。

日付：11 月 26 日（月）1 日目
大学名：南開大学
氏名：劉侃

今日は朝からずいぶん忙しい思いをしたが、夕刻日本に着いた。

飛行機を降りた時の印象は、北京とあまり変わらないというのが正直な感想だった。都市建設という意味では、北京市の規模と発展の度合いは、この大阪と比べても見劣りしないし、むしろ大阪より進んでいるような気がしたくらいだ。

しかし、たとえ物質文明的には大きな差が無かったり、あるいは少しばかり進んでいるとしても、都市文化や道徳的な面では、北京は日本に遠く及ばないと感じた。

日本の大阪で北京との違いを最も感じたのは、人を大事にする細やかな配慮と人々の道徳的な資質だった。街の店員さんたちの笑顔は、北京でよく目にするあのこわばった生気の無いものと違い、心の底から湧き出るような笑顔だった。言葉は解らなくても、笑顔があれば多くの問題が解決できるし、笑顔が街を人情味溢れるものにする。また道徳面でも、日本人の意識の高さには驚かされた。一人も信号無視をする人がいなかった。車の走っていない道路でも、立ち止まって信号が青になるのを待つ人たちがいた。こうした交通規則遵守の意識の高さは想像以上のものだった。

中国の大都市も建築物などの物質的な面では、先進国と同じようなレベルかもしれないが、都市の文化や道徳的資質という面では、依然発展途上にある（実はこれこそが最も解決の難しい問題である)。北京よ、中国よ、本当の意味で先進国と同じレベルになるにはまだまだ長い時間が必要だということか‥‥。

日付：11 月 27 日（火）2 日目
大学名：北京大学
氏名：李林

今、僕は名古屋のホテルの部屋で都市が発散する息吹のようなものをゆっくりとかみしめている。

今日の主な見学先はオムロン太陽工場だった。この障害者のための工場は、決して私が想像していたような労働集約型の工場ではなく、従業員の技術レベルの向上に熱心に取り組んでいた。工場には身障者自らが研究開発した機械がたくさん置かれていたが、そうした機械によって作業がしやすくなり、身障者の自己実現を可能にしていた。

実は午後の寺院参観に最も興味があった。なぜなら、宗教学は僕の専攻（哲学科）の中でも非常にセンシティブな分野であり、ずいぶん前から信仰を持つべきかどうか悩んでいたからだ。もちろん、ここで言う「信仰」とはカトリック教のことだが‥‥。

三つの寺院はどれも大乗仏教の寺で、観光客で溢れていた。大乗仏教では誰もが成仏で

きると説くが、「菩薩」という仏の存在が中国と日本で仏教が盛んに信仰される有利な条件となっている。

京都の古くて落ち着いた雰囲気がとても気に入った。これこそが民族精神の真の体現だと思った。中国もこうした日本の伝統文化に対する思いをもっと学ぶべきだと思った。

日付：11 月 27 日（火）2 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：衣倩

今日は日本訪問の 2 日目。私にとっては本当に日本を見ることのできた最初の日だったとも言える。車中、ガイドの呂さんがいろいろ説明してくれたが、多すぎて覚えきれなかった（車酔いのためにメモがとれなかった)。それでも日本人のきれい好きなところが印象に残った。道路や自動車のきれいなことといったらなかった！運転手は私たちが見学している間、何もすることがなくなると、ガラスやタイヤを拭いていた。ガラスはいつもピカピカだった。次に印象に残ったのは日本人の礼儀正しさだ。隣近所の関係もとても良いようだった。それにひきかえ、今の中国は近所同士の付き合いが何と希薄になってしまったことか‥‥。

最初の目的地は京都にあるオムロン太陽工場だった。思いもよらなかったことに、そこは身障者のための福祉会社で、オムロンと「太陽の家」が共同経営するオムロンの子会社の一つだった。ここで作っている製品は携帯電話のバックライト、交通信号灯、血圧計、体温計など、どれも小さなものだが、私たちの生活になくてはならないものばかりだった。そこは人間と機械の理想的な関係の実現を目指し、社会福祉に努め、身障者が自己実現を果たすための機会を提供する場所ではあったが、単なる慈善事業ではなった。工場は彼らが身障者だからといって甘やかすということはなく、作った製品が合格品かどうか一つ一つを厳しく検査していた。また、工場は身障者自身の手になる発明や創造を奨励し、彼らの体力ではなく、智恵を活かす工夫をしていた。

昼食後に高台寺を訪れた。日本の古い建築は美しく、荘厳だった。それは中国の長安と洛陽に倣って建てられたというが、中国の建築とはまた趣が違っていた。高台寺では日本の茶道を体験した。正直言って、苦くてあまり美味しいとは思わなかったが、和菓子はとても美味しかった。私もお茶を点ててみたが、先生によくできたと褒められた。次に高台寺にほど近い清水寺を見学した。断崖の上に舞台が建てられていた。桧皮葺の屋根が木の大柱で支えられていた。境内の中に知恵・財産・美しさを代表する 3 本の名水があったが、時間が無くて飲めなかった。

なぜ時間がなかったのかと言えば、私たちは名古屋行きの新幹線に乗らなければならかったのだ。乗ったのは「のぞみ」で、トンネルのたびに耳がおかしくなった。

最も嬉しい時間が来た！カニ尽くしの宴会だ！和室で美味しいカニを食べて、まさに至福の時だった。ホテルの後ろにあったスーパーで梅干を買って食べてみたが、そのまずいことといったらなかった。気持ち悪くなって吐きそうになった。日本の梅干には徹底的に失望させられた！

日付：11 月 27 日（火）2 日目
大学名：南開大学
氏名：郭暁菲

日本に着いた翌日、集合時間までにまだ時間があったので、ホテルの外で待っていた。美しい時間だった。道の両側に整然と植えられた金色に輝くイチョウの樹。イチョウは中国では珍重され、周囲に柵がめぐらされているほど大事にされている樹だ。品種が違うのかもしれないが、あれほどたくさんの美しく輝くイチョウの樹が、ごく普通の道端に植えられている景観は、まるで鮮やかな色彩溢れる油絵のようだった。

のんびりと写真を撮る私たちと、早足に通り過ぎる日本人は強烈なコントラストをなしていた。効率と時間の観念がこの工業大国の国民一人ひとりに徹底されているようだった。

京都は落ち着いた雰囲気に満ち、その簡素で伝統的な民家が私の心をなごませた。

オムロン太陽工場で紹介のビデオを見たが、次の一言に涙が出た。「私はずっと税金を納めいと思っていたので、昨日、初めて納税証明を受け取った時は本当に嬉しかった。これで私も役に立つ人間だということが証明されたのですから‥‥」。身障者に働く場所を提供しようとしれば、余計なコストがかかる。いろいろと力を費やして身障者に働いてもらうよりも、直接補助金を与えるほうがずっと簡単で現実的なのかもしれないが、経済的な方法では計算できないこともある。達成感や人間としての誇りは決して他人から与えられるようなものではないと思う。

私は次のような質問をしてみた。「御社の身障者に対する思いやりと援助は素晴らしいことだが、中国では障害を持つ従業員の数が一定比率を超える企業には税制面の優遇政策がある。また、御社は社会福祉団体とも協力しているが、利益分配システムはどのようになっているのか。また、身障者が働く職場となると、機械の改良が必要になり、効率やコストを犠牲にすることになる。工場への投資が利益を上回った場合は、社会効果はあっても、経済効果は望めないことになるが、これについてはどのように考えているのか」。

回答は以下の通りだった。「①土地は政府が提供している。②親会社の優遇価格がある。③オートメーション化した設備で効率を高め、利益が上がるように努力している。④会社の収支はバランスしている」。

私の質問は経済学専攻の学生としてコストと利益を考えすぎるあまり、辛辣すぎたきらいがあるが、身障者に自己実現のための機会を提供しているという点には心を動かされた。

また、現場の第一線に立つ身障者の手になる技術革新と発明が印象的だった。彼らは単なる労働者ではなく、クリエイティブな創造者なのだ。私にはハードウェアや経済指標上の格差以上に、日本と中国のイノベーション能力の格差のほうが切実な問題のように思われた。中国人もこうした質の高い生活ができること、また中国人も日本人のように進取の精神を持つようになってほしいと強く思った。

午後の高台寺での茶道体験と清水寺の風景の中で最も印象深かったのは、緑の山々と林を赤く染め尽くしている紅葉だった。真っ赤な紅葉は生命力溢れる「紅い」火のような純粋さと透徹も象徴で、赤と黄色が一面に広がっていた。私は目を閉じてそれに駆け寄り、しっかりとそれを抱きしめ、それと一つに溶け合い、永遠に童話の世界のような完璧な静けさと美しさに身を投げ出したい衝動に駆られた。

カニ尽くしの宴会では、見識を広めることができた。

夜、父にハガキを書いた。南開大学に入学し、また学生会の役員を務めていた関係で今回の代表団の一員に選ばれ、こうしてすばらしい旅をし、その中で様々なことを学び、日本の美食と美しい景色を堪能している。お世話になった人々、先生、主催者、旅行社に感謝しなければならないと思った。そして両親がこれまで大事に育ててくれたからこそ、今の私がある。心の底から感謝した。

中国のお父さん、お母さん、おやすみなさい‥‥。

日付：11 月 28 日（水）3 日目
大学名：北京大学
氏名：李月

今日の行程は名古屋―豊田市―横浜だった。一日でずいぶん長い距離を移動したことになるが、トヨタ自動車の訪問が最も印象深かった。

「車到山前必有路、有路必有豊田車(車が山のふもとに到れば必ず道がある。道があれば必ずトヨタの車がある)」と、袁団長が口にしたこの広告コピーは、確かにトヨタというブランドの中国におけるイメージと、高品質・低エネルギー消費に代表される日系自動車のイメージそのものだ。5 時間に及ぶ見学の中では堤工場が最も印象に残った。堤工場はトヨタ本社周辺に 12 ある自動車組立工場の一つである。そこではウィッシュ・プレミオ・アリオン・サイオン（初代）・カムリ・プリウス（2 代目）の 6 モデルが生産されていた。高効率かつ人間本位に設計された生産ラインで多品種混合生産方式による秩序立った生産が行われていた。工場見学では以下の点が心に残った。①高度に機械化された生産方式により、作業員の労働強度を最大限低減させている。②徹底した人間中心の設計で、人為的なミスが起こる確率を減らしている。③「かんばん方式」によりできるだけ在庫量を減らしている。④生産ラインをルール化することで自動車の生産効率を高めている。堤工場の細部に配慮した緻密な設計には驚くばかりだった。例えばかんばん方式による部品調達、生産ライン脇の赤いひもスイッチ、音楽や液晶表示による注意喚起等々、どれも小さなことだが、中国の工場が学ぶに値するものばかりだった。そしてその核心は従業員による工具の改善と提案の奨励と推進にあるのだと思った。

日付：11 月 28 日（水）3 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：彭韡
トヨタ堤工場＋トヨタ会館

組立ライン：ライン全体が人に与える印象は「静かな忙しさ」だった。おそらくこれまで自動車広告（その中には自動車の組立工程に関する紹介があった）をいろいろと見ていたこともあり、堤工場の組立ラインを見ても格別新鮮な感じがあったわけではなかったが、よく考えてみれば、今、私は世界でも屈指のトヨタ自動車のコア工場に身を置いているのだ！そう思ったとたん、心臓がドキドキしてくるのを感じたが、堤工場の全体的な印象はとても穏やかなものだった。なぜなら、すべての作業が秩序立って行われ、トラブルが発生しても、それはどれも想定内のことなので、慌てふためくことも無く、完璧に順を追って効率良くトラブルの処理ができるようになっているからだ。整然とした秩序の中で作業が進められているので、どんなに忙しくても混乱することがない（まさに誰もが願う境地)。トヨタはその計画と工場内規律によって、数千人の大工場であろうが、数十万人の従業員を擁するグループ全体であろうが、どこも同じように整然と生産活動が行われているわけだが、この点はまったく敬服するほかなかった。秩序とグループの良い伝統を維持しつつ、常にモチベーションを高め、褒賞を忘れず、従業員の創造性を顕彰し続けている点は、中国も大いに参考にできると思った。

溶接ライン：4－6 台の巨大な機械が両側に置かれ、ラインの準備が完了するのを待っていた。作業員がプログラムを操作して指示が出されると、すぐに最速かつ最高精度の作業が始まった。たまに「中国からのきれいな女子学生を見て恥ずかしくなって止まってしま

う」(袁団長の冗談) こともあったが、その時はその時で静かに修理されるのを待っていた。それはオートメーション化された機械と人間の調和であった。また、毎年 60 万トンの溶接廃棄物が自動車以外の産業で最大限活用されているとのことだったが、それはまさに生産と環境の絶妙な調和だと言えよう。

トヨタ会館：トヨタグループの上層部から一般従業員にいたるまで、その一貫したプロ精神に感服した。私と他の 9 名の代表団メンバーは質疑応答の時間に質問できなかったので、昼食をとりながらの質問の機会が与えられた。本社と中国部からの数名が、食事もそこそこに私たちの質問に終止真剣に答えてくれた。通訳を務めてくれた二人の中国人社員にいたっては、まったく食事がとれない状況で申し訳なかった。

また、日本の子供たちが無邪気で活発なことにも驚いた。トヨタ会館を見学している時に、やはり見学に来ていた日本の子供たちに会ったのだが、そのうち何人かは中国語が話せた。中国語で「ニーハオ！」と挨拶し、別れる時にも「ツァイチェン（再見）！」と言うのを忘れなかった。異国で経験した心温まる瞬間だった。また、ロボットの演技を見ていた時に、子供たちが床に腰を下ろしていたが、それは後ろの人の邪魔にならいようにという配慮からで、こうした日本人の子供の頃からの教育には感心させられた。

日付：11 月 28 日（水）3 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：筍晨

朝、豪華な朝食を楽しんだ後、トヨタ自動車に向かった。この世界有数の自動車工場のその王者としての風格を一目見たとたんに、ずっと前に流行った「車到山前必有路、有路必有豊田車(車が山のふもとに到れば必ず道がある。道があれば必ずトヨタの車がある)」という耳慣れたキャッチコピーが思い出された。トヨタ、クラウン、カムリ等の名前はずいぶん前から知っていたが、いわゆる「百聞は一見に如かず」で、今日はバラバラな部品が完成車に組み立てられていく様子を初めて見ることができた。作業員たちが忙しそうに、かつ整然と働き、工場内は静かで、空気もきれいだった。床にはゴミが無く、標準的な清潔で近代的な工場だったが、その全面的なオートメーション化が最も印象的だった。すべての工程はコンピュータ制御でミスが出ないようになっていた。「大」は機械の組立や溶接から「小」は 1 個のナットの保管と補給にいたるまで、すべてオートメーション化された情報伝達が採用され、世界一流の製造ラインと言うに恥じないものになっていた。工場見学の後、ホールに展示されていた完成車を見学したが、その中にはハイエンド車種もいくつかあった。最後にロボットによる演奏があり、それが午前の見学終了を告げるピリオドになった。

その後、一時間半新幹線に乗った。それは日本の長距離交通を体験する良い機会になった。中国よりずっと楽な旅だった。新横浜駅に到着後、中華街に行ったが、そこは中国人が溢れ、誰もが友好的で親切だった。異国の地でこうして同胞に出会い、慣れ親しんだ言葉を耳にしたときの感じは格別だった。夕食は「重慶飯店」で食べたが、中国語を話すウエイトレスはいなかった。

日付：11 月 29 日（木）4 日目
大学名：北京大学
氏名：劉薇

今日は企業 4 社を見学し、とても忙しい一日だった。

先ず鎌倉にある資生堂の工場を見学した。「資生堂」というブランド名は普段から耳にしていたし、自分でもいろいろな化粧品を使っているが、今日のように至近距離で化粧品の製造過程を見るのは初めてだった。資生堂の見学で最も心に残ったのは、同社の品質に対する厳しい要求と環境保護分野における貢献だった。工場全体が様々な安全・衛生・運転・検査基準を遵守し、製品品質が確保されていた。廃棄物の回収利用では、最良の方法を考え尽くしてゴミを 100%回収し、ゼロエミッションを達成していることは称賛に値することであり、見習うべきだと思った。

新日本石油根岸製油所では、石油精製のプロセスを見学したが、日本経済を牽引している原動力のようなものを感じた。

午後は東京の NEC ブロードバンドソリューションセンターの見学だった。見るもの、聞くもののすべてが新鮮で、「人を基本とする科学技術」とはどういうものかが分かったような気がした。かわいいロボット、オフィスの新しい働き方、安全管理の設計では、いろいろと啓発を受けるところがあった。

夜は「世界 500 強企業」の一つである住友商事東京本社を見学し、大いに見聞を広めることができた。長い歴史のある住友商事は様々な分野で事業を展開し、環境保護と社会貢献にも積極的に取り組んでいた。社員との懇親会では、日本企業とその社員の仕事ぶりについて知ることができた。住友商事の心づくしのもてなしがとても嬉しかった。

日付：11 月 29 日（木）4 日目
大学名：北京工業大学
氏名：張旭

企業 4 社を見学し、忙しくも充実した一日だった。

資生堂：

工場見学後の印象は以下の三点にまとめられる。①きちんと整理されていて清潔――工場に入る前に全員帽子をかぶり、衣服についている埃を取り除いた。作業員が帽子・マスク・手袋で完全武装していた。②ハイスピード――すべてがオートメーション化され、作業員は検査と監督をするだけでよかった。人の手を機械に代替させたことで生産効率が数倍から 10 数倍高まった。③環境保護――工場からのゴミと汚水はすべて回収されていた。工場内に汚水処理施設があり、水の循環利用が実現できていた。また、資生堂の包装はすべて分解性樹脂を使っており、自然環境に配慮したものになっていた。

新日本石油根岸製油所：

短い見学の中で最も印象に残ったのは、やはり環境保護施設と防護施設であった。入港したタンカーの石油漏出を防止するために、専用の防油フェンスが設置されていた。製油所の原油貯蔵タンクの周囲にもすべて防油フェンスが取り付けられていた。また、製油所周辺の道路と住宅地にはウォータースクリーンのパイプラインが通っており、火災が発生すると、水が噴き出して高さ 10 数メートルのウォータースクリーンを作り、火の回りを阻止するようになっていた。建設コストがかさみ、伝熱効率も低いので、中国ではあまり見かけない空気による大型冷却塔が採用されていた。中国ではむしろ従来型の水による冷却塔が多いが、この方法は用水量が多く、しかも水を汚染するので、水の節約にも環境保護にも不利である。また、製油所内の廃水処理技術も非常に進んでいた。処理後の水はリサイクル利用され、処理後の水の中では水鳥が遊んでいた。重工業企業でありながら、ほとんどゼロエミッションの域に達していた。

NEC：

IT 設備と通信設備のインテリジェント化およびヒューマンインターフェースの面で初めての体験が多かった。機械と人の手の絶妙なコンビネーションによって簡単かつスピーディーな生活が実現されつつあった。

住友商事：

歓迎懇親会が用意され、中国籍社員を同伴させてくれた。懇親会では、地球環境部部長と話しをすることができたが、同氏によると、中国での環境保護事業は非常に難しく、客観的に見て、中国の環境汚染の程度は想像を超えたものになっているという。住友商事には天津に海水淡水化装置建設の計画があるが、実地調査の結果、汚染の程度がすでに簡単な方法で処理できる範囲を超えていることが判明した。「もし効果的な方法が見つからないか、または海水の汚染物質含有量がこのまま改善されなければ、悲しいことだが、このプロジェクトは立ち行かなくなる」と残念そうに言っていた。また、中国市場の将来性に対する十分な自信がうかがえた。今はまだ事業範囲が沿海地区に限られているが、西部地区と東北地区の市場にも注目しているということだった。

日付：11 月 29 日（木）4 日目

大学名：南開大学

氏名：李欣瑞

今日の日程は非常にコンパクトに組まれていて、一日で資生堂・新日本石油・NEC・住友商事という日本を代表する企業 4 社を訪問した。忙しくて少々疲れたが、たくさんのことを学び、多くの収穫があった。資生堂の品質管理は厳し過ぎるほどの要件で管理されていたが、まさにこうした常に良いものを目指す精神が、数十年もの間、同社をして化粧品業界トップの座に君臨させているのだと思った。また、資生堂の産業廃棄物のリサイクル利用率は 100%で、そのために多くの人力・資材・財力を費やしているが、環境と国民生活全体のことを考えて、たとえコストがかさんでもやり遂げるという気概が感じられた。その企業としての高い責任意識に敬服するとともに、私たちも学ぶべきだと思った。

住友商事はある意味、奇跡的なビジネス展開をしていると思った。投資分野が非常に広く、事業内容も豊富だった。多元的な投資をすることで投資リスクを下げ、利益増を目指すこともできるが、それにより生じる資金の過度な分散は、力を集中させてある産業を発展させるという意味ではマイナスに働き、無視できない問題となる。住友商事 がこの法則を打破し、「ラーメンから鉄道まで」といったビジネスを展開していることは、感嘆に値することだと思った。住友商事はまさに「Nothing is impossible if you put your heart　into it（それに心血を注ぐなら、不可能な事は何も無い）」という言葉の正しさの証しだと思った。

日付：11 月 30 日（金） 5 日目

大学名：北京工業大学

氏名：宋大林

午前、東京タワーと皇居外苑を見学した。世界的大都市としての東京の気概と日本皇室の厳かな美しさを実感した。

みずほコーポレート銀行が盛大な昼食会を開いてくれた。見学した中では、人事制度が一番印象的だった。北京大学附属中学校や清華大学附属中学校を含む世界各地の学校に奨学金制度を設け、早いうちからの人材確保に力を入れているということだった。またディ

ーリングルームも見学したが、ディーラー間の分業が秩序正しく行われていた。一人ひとりのスペースが狭く、ごちゃごちゃした環境ではあったが、誰もが整然と一心不乱に仕事に取り組んでいた。

昼食会のときに「ディール」という言葉の意味を知った。「ディール」とは外貨や証券の取引のことをいう。「ディール」では銀行が重要な役割を果たすことになるが、つまりユーザーに手法・サービス・投資銀行を提供することが、即ち「ディール」だという。

日付：11 月 30 日 5 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：周池

今日のスケジュールは盛りだくさんだった。朝から小雨が降っていたが、東京タワーと皇居の見学は予定どおり行なわれた。二重橋では記念写真をたくさん撮った。

その後、みずほコーポレート銀行を見学した。ディーリングルームが最も印象深かった。ディーリングルームは一つの大きな部屋で、スタッフ全員がそこで仕事をしており、仕事の内容によって幾つかのチームに分かれていた。ディーリングルームに入った瞬間、その緊張した雰囲気が伝わってきた。スタッフたちが山積みにされたデータやレポートの中で机に向かって何かを書いて（描いて）いた。電話が引っ切りなしに鳴り、顧客担当係りが電話を取っては、顧客と金額などについて確認していた。受注後は別のチームに回され、具体的な作業が開始される。相当な数のチームをすべて一つの大きな部屋に入れているのも、お互いすぐ連絡を取り合い、情報交換をし、仕事の効率を上げるためだという。中に暇そうにしているチームがあったが、それはパリなどのエリアを担当しているチームで、時差の関係で通常一番忙しくなるのは夜の 3 時からだという。そうした時間に人が働くというのが信じられなかった。

みずほコーポレート銀行は福利厚生が行き届いていると聞いていたが、今回の見学を通じて、その福利厚生が実はハードワークと引き換えになっていることが分かった。朝の 6 時から夜の 10 時、11 時まで働くこともあるという。本当に苦労して仕事をしているのだ。「Hard work makes worth」という言葉をしっかりと胸に刻みつけた。

日付：11 月 30 日（金）5 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：李鵬

主な訪問先：東京タワー、皇居、みずほコーポレート銀行、ディズニーランド

ディズニーランドで思いっきり遊んだのでもうヘトヘト。立っていられないくらい疲れた。この数日、忙しいスケジュールが続いていたのでもう限界。今日の活動をいろいろ書けば長くなるので、以下のように簡単にまとめてみた。

1. みずほコーポレート銀行では、職員がたくさんのモニター画面をひっきりなしに操作したり電話で連絡をとったりと、とても忙しそうだったが、整然と、効率よく自分の仕事をこなしていた。概況説明の時に、担当者から投資について少し説明があったが、私たちのような門外漢でも理解できるように分かりやすく話してくれた。
2. 天気はあまり良くなかったが、ディズニーランドを楽しもうという気持ちにはまったく影響なかった。エントランスゲートをくぐるやいなや、みんな夢中になって遊んだ。ユーモラスなアトラクションを見たり、スリリングなジェットコースターを体験した

り、大小さまざまなスポットを見て回った。もちろんあのすてきなパレードも見逃さなかった。初めてのディズニーランドはこれまで体験したことのないものばかりで、楽しさ満杯だった。素晴らしい午後＋夜になった。代表団のメンバー全員、疲れてクタクタだと思うが、私の何の脈絡もない日記もこのへんで終わりすることにする。もうダメだ‥‥、グー！グー!!グー!!

日付：12 月 1 日(土) 6 日目
大学名：北京大学
氏名：董旭超

早起きして日中経済協会へ行き、ホームステイ先となるトヨタの山本さんが迎えにきてくれるのを待った。

山本さんはちょっと怖そうな感じがしたが、実際はとても面白い人だった。今日は是非、初めて温泉（風呂）に行ったことを書くことにしよう。

山本さんと下の息子さんが温泉に連れていってくれた。さすがは日本の温泉だ。大小様々な湯船があって、浴室が男女別々になっているものや、水着をつけて入るカップルや家族用のもの、淡水のものや海水のもの、漢方薬の入ったものなど数え切れないほどだった。湯けむりが立ち昇る様子はテレビで見たとおりで、日本に来た甲斐があったと思った。そのあと、二男の拓馬さんや彼の友人たちと一緒に居酒屋へ行った。そこはとても日本的なところだった。メニューの日本語は全くわからなかったが、これまで飲んだことのない酒や飲み物を楽しむことができた。拓馬さんの友だちの中に中国語にできる人がいたので、言葉の不自由はなかった。

一戸建て住宅の 1 階の客間に泊まらせてもらったが、大きな畳の部屋を独り占めできて気持ちよかった！

東京都江戸川区にて

日付：12 月 1 日(土) 6 日目
大学名：北京工業大学
氏名：秦桐

みずほコーポレート銀行に見学に行ったとき、ホストファミリーの中澤さんには会えなかった。武漢へ出張しているということを聞いて、中澤さんは本当に忙しい人だと思ったが、あとで日本人はみな忙しくしていることが分かった。どうりでいつも出張ばかりしているわけだ。中澤さんと奥さんには子供がいない。二人で三階建ての小さな洋風住宅に住んでいたが、「スズメは小さくても五臓は揃っている」というように、必要なものはすべて揃っていた。少し狭い感じがしたが、二人で住むにはちょうど良い広さだ。中国では、私の母親くらいの年齢の人たちの趣味と言えば、テレビドラマを見ることくらいだろうが、日本人はよりスポーツ志向だ。家にウォーキングマシンやマッサージ機などのフィットネス用のマシンを置いたり、定期的にフィットネスクラブへ行ってトレーニングをしたりと、日本人の暮らしはメリハリに富んだものだった。この点は大いに学ぶべきだと思った。

中澤さんの家で少し休んだ後、二人は私を連れて散歩に出た。歩きながら日本の風俗習慣についていといろと話してくれた。私たちは橋の架かる渓流に沿って歩き、鬱蒼とした神社と洗足池公園を通り抜け、荏原病院の前を通って東京工業大学の門の前に着いた。私が北京工業大学の学生だということを知っていて、わざわざ連れて来てくれたのだ。東工

大のキャンパスは、日本のこの季節はどこもそうであるように、イチョウの葉っぱが地面を覆い、静かなキャンパスに古い建物がよく調和してまるで一幅の絵のようだった。こういうところで勉強できたらどんなにいいかと思った。

夜、私がハローキティの店へ行きたがっていることを聞いた夫妻は、急いでインターネットでどこにその店があるかを調べて連れて行ってくれた。大人二人が半大人（私）を連れておもちゃを選んでいたあの場面を私は絶対に忘れない。その時はちょっと恥ずかしいと思ったが、とてもありがたかった。

日付　：12 月 1 日(土)　6 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：胡鈺

盛大な拍手とともに森田童史さんが紹介された。私はこれから 2 日間、森田さん一家とともに本当の日本人の生活を体験することになるのだ。

最初に直面したのは言葉の問題だった。私は日本語が全くできず、英語もカタコト程度だが、幸い森田さんが英語を話したので、英語と中国語を駆使し、紙と鉛筆を使っての筆談で何とか切り抜けた。

これまでは歴史問題の影響からか、日本人に対して偏見があり、義憤に駆られることもあったが、今日、実際に森田さん一家と一緒に過ごしてみて、日本人がとても礼儀正しいことが分かった。

家に着くなり、家族全員が笑顔でお茶をついだり、果物をすすめてくれたりした。夜、一緒に餃子を作って食べていると、まるで自分の家に居るような気がしてきた。何もかもが自然で、親しみを覚えた。

晩ごはんの後、一家 4 人とトランプをして遊んだが、4 人はとても楽しそうで、本当に仲の良い家族であることが分かった。

森田さんのお宅でもう一つ感じたことは、中国では考えられないほど部屋がきれいなことだった。中国もアジアの大国として、この点は日本に見習わなければならないと思った。

中国は本当の日本を正しく認識しなければならない。

日付：12 月 1 日(土)　6 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：王亦然

不安な気持ちを胸にホームステイ先の福田さんに会った。とても明るくて親切な人で、中国語が上手だった。

福田さんは私を浅草寺にある日本の伝統的な工芸品を売る店に案内してくれたが、日本人の生活をより深く理解できたように思う。上野公園の美しい風景も忘れられない。

福田さんの家に戻り、奥さんに会った。音楽の先生をしている優しい女性だ。福田さんのお宅は伝統的な日本家屋で、ベッドではなくて畳の上に布団を敷いて寝る。福田さんは仕事を持っているが、奥さんは家で子育てのかたわらバイオリンを教えているという。

福田さんの子供の洸君と久美さんは二人とも高校生で、勉強が忙しく、今日も週末だというのに、塾へ行っていて、晩くなってから帰ってきた。

晩ごはんの後、私たちは中日両国の教育問題についていろいろ話し合った。洸君と久美さんともこれからの勉強の方向性について語り合った。

福田さん一家の親切なもてなしがとてもありがたかった。明日は福田さんの奥さんが私を陶芸に連れて行ってくれるという。明日が待ち遠しい。

日付：12 月 2 日(日) 7 日目
大学名：北京工業大学
氏名：白晨晨

一泊二日のホームステイが無事終わり、緊張感も多少ほぐれて来た。こうした緊張感は文化の違いから来るもので、それは時に不必要な誤解を招くこともある。だが、実際は、ホームステイの間、私はまったく堅苦しさを感じることもなく、日本人の親切なもてなしだけが印象に残った。一緒にプリクラを撮り、カラオケであゆの歌を歌い、ショッピングをし、本や中古 CD を買ったりしてとても楽しかった。今日は代表団がまたホテルに集結した。みな興奮した面持ちでそれぞれホームステイ先で体験した日本の生活のあれこれを話していたが、私は、日本のホームステイ先の恵まれた生活水準や温かいもてなしといったこと以外に、何かほかの感想はないのだろうかと思った。この数日間の日本での体験、特にホームステイを通じて、私は日本と中国は、どちらかがどちらかに与えたり施したり、また補償したりというような関係ではなく、経済的に共通の利益があることを実感することができた。政府レベルでは国益という問題があると思うが、では中日の国民はどうか‥‥？中日両国の文化はどうか‥‥？

両国の関係は、あたかも二人の子供がドアの後ろから、見たさ半分、怖さ半分で、海を隔てた相手の様子をうかがっているように見える。インターネットやメディアを通して相手を理解するだけではまったく不十分で、中国人も日本人も相手の生活を自分の目で見て、理解したいと思っているが、そのような機会はそうそうない。幸運なことに、今回、私たちは日本を理解する機会を得て、日本と中国との間に橋を架ける使者として日本にやってきた。その効果は取るに足りないものかもしれないが、たとえわずかでも、それが何かの役に立つのであれば、それは決して無駄なことではない。ホームステイ先の家族が真剣に中国について語り、中国のことについていろいろと質問してくるのを目の当たりにし、私は心から嬉しかったし、ありがたいと思った。

私たち若者に必要なのは、盲目的にならずに客観的に彼我を認識することなのではないだろうか‥‥。

日付：12 月 2 日(日) 7 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：楊強

昨晩は畳の上に布団を敷いて寝た。暖かい布団からなかなか出る気がしなかったが、朝 6 時半にはもう窓の外で小鳥が鳴き始めた。ホームステイの二日目が始まった。

日本の朝は静かだった。入野さんはグーグルアースを使って私たちがいる場所や学校の位置を教えてくれた。僕たちよりずっと早く起きていた入野さんの奥さんがサラダをつくってくれていたので、入野さんの息子さんとパンを買いに行った。日本人家庭の多くがアメリカ式の朝食をとるが、ミルクと焼きたてのパンが今日の朝食だ。

昼には日本ならではの 100 円ショップへ行った。中国の 10 元/2 元均一の店に似ているが、それよりも品数がずっと多く、同じような店がたくさんあった。

今日は日本の「駐車場文化」の一端を知ることができた。セルフ式のパーキングが至る

ところにあり、とても先進的で、しかも人にやさしく、6 階建ての駐車場は大小様々な車で一杯だった。駐車場の中はとても狭く、まるで険しい山道を登っているようだった。

入野さん一家と別れる時、奥さんが忘れ物をしないようにと声をかけてくれた。恥ずかしがり屋の娘さんといっしょに私の旅行の無事を祈ってくれた。一緒に買い物をしたとき、私が買いたいと思っていた CD を一家中であちこち探し回ってくれたことが思い出された。本当にありがたかった。私の中の日本人イメージ、特に日本の一般人に対するイメージが、親しみのある生き生きとしたものに変わった。

会えば別れるのは人の世の常、入野さん一家の健康を願いつつ、いつかまた会える日が来ることを願った。

日付：12 月 2 日(日) 7 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：範凡

ホームステイの二日目は少し遅く起き、木所さん心づくしの日本式朝食を味わった。今日の朝食はいろいろと盛りだくさんだったが、普段の朝食はもっと簡単だという。食事の後、家を出て雅子さんと会い、いっしょに車で横浜へ行った。そこでは今度のホームステイで最も忘れられない出来事、つまり木所さんが出場する 8 人乗りカヌーレースが行われていた。僕は本物のカヌーレースというのをこれまで見たことがなかった。川べりに座って日本の友人たちとおしゃべりしながら、晩秋の川岸の美しい景色を眺め、木所さんに声援を送った。実に楽しい時間だった。木所さんは健康そのものだった。このレースは私への最高のプレゼントになった。

午後、木所さんと雅子さんが私をホテルまで送ってくれた。二人が帰る前に一緒にコーヒーを飲んだ。互いに連絡先を教えあい、別れを惜しんだ。私のためにいろいろとしてくれたことに対しお礼を言った。木所さん一家の親切を忘れることなく、いつかまた必ず会える日が来ると思った。

12 月 2 日(日) 7 日目
大学名：南開大学
氏名：趙陽

ホームステイの二日目だ！夏実さんはコミュニティサービスのためとかで、僕が宮村夫妻と朝食を食べる頃にはもう出かけていて家にいなかった。結局、今度のホームステイでは夏美さんとは一度会ったきりだった。テーブルの上には暖かな朝の陽光が降り注いでいた。奥さんがつくってくれた朝食は美味しく、ケーキもかわいらしかった。名残惜しいと思った。食事の後、奥さんの運転で、僕たちはお台場にある日本科学未来館に行った。

是非、ここで日本の博物館について書きとめておこうと思う。日本の博物館は「無料券」を配っているところが多いが、入館料自体も非常に安い。だからといって、展示ホールのレイアウトや展示内容の手をぬくというようなことはなく、その高い展示レベルには驚かされた。また、子ども連れの若い夫婦もたくさん見に来ていた。日本の子どもたちは小さいうちから、こうした教育的雰囲気の中で育てられるのだから、きっと優秀な大人になるに違いないと思った。中国もこうした日本政府の国民レベルを向上させるための取り組みを学ぶべきだと思った。

午後 3 時半、宮村さんがグランドプリンスホテルまで送ってくれた。宮村さん一家には

心から感謝する。
　夜は東京の有名なスポット――お台場に買い物に行った。

日付：12 月 3 日（月）8 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：劉傑

　僕の家は農家なので、「野菜くらぶ」で説明されたほとんどのことは知っていたが、その現代的で合理的な経営と生産理念を聞いて、農業大国としての中国がこのレベルにまで達するにはまだまだ時間がかかり、農業生産モデルを徹底的に改善していかなければならないと思った。
　今日のハイライトは何と言っても温泉だった。適温の心地よい湯につかったり、室内風呂と露天風呂を行ったり来したりして爽快だった。疲れきった体が俄かに感覚を失い、すべてから解き放たれたようなあの感覚‥‥。まるで一滴の清水になったような気がした。
　温泉の後の食事とカラオケでは大いに盛り上がった。代表団の気持ちが一つになり、自分たちが一つの「チーム」であることを初めて実感した。残念なことに、時間の関係で、カラオケは僕の歌心を満足させる前に終わってしまったが、今日は本当に楽しい一日だった。

日付：12 月 3 日（月）8 日目
大学名：北京航空航天大学
氏名：楊一

　山地面積が 70%を占める日本に「野菜くらぶ」のような農業地区があることはまったくの驚きだった。
　福建省出身の呉博士から「野菜くらぶ」の経営モデルについての詳しい説明があり、その後、トマトの試験用ハウスの見学やトマトの味見をしたり、アスパラガス畑を見たりした。農業のことはよく解らないので、まったく素人的感想だが、この「くらぶ」の成功の鍵は日本の隅ずみまで普及した自動化にあると思った。ハウスのオーナーは自動制御装置が故障したらお手上げだというが、これまでそういう状況になったことはないそうだ。
　その後、代表団は疲れた体を引きずるように天皇も訪れたことがあるという温泉地へと向かった。温泉につかった瞬間、全身が解き放たれるような感じがした。
　夕食会では、僕と同じ生年月日の南開大学からの女学生と一緒にカラオケで一曲歌った。

日付：12 月 3 日(月)　8 日目
大学名：南開大学
氏名：韓健

　都会を離れ、今日は日本の農村に見学に行った。日本のハウスは自動化の程度が中国のそれよりも高いというだけで、中国のものと大差ないように思われた。ただ、両者の一番の違いは、環境保護に対する認識だった。日本人の節約精神、特に水資源を大事にすることはよく知られているが、農業の灌漑用水についてもそれは同じで、先進的な技術で厳しくコントロールされていた。化学肥料の使用についても、天然のエコロジカルな肥料を使い、「三日漁に出て、二日網を干す」式に土壌を休ませてその活力を回復させるという科学的な管理モデルによって科学的な農業が行われていた。中国の社会主義新農村もこうした

方向性を目指しているが、その実現にはまだまだ時間がかかると思った。

夜は温泉旅館に泊まった。日本のいわゆる「温泉文化」をじかに体験することができた。日本人は入浴を神聖なものとして捉えているようだ。温泉旅館に泊まって温泉に入ることは単なる楽しみというよりも、いやなことはすべて洗い流し、心身ともに解放される一種の洗礼のようなものかもしれないと思った。今日はおそらく代表団のメンバーにとって一番楽しい夜になったのではないだろうか。夕食後、カラオケを歌い、各大学が一つに溶け合い、兄弟姉妹のようになり、本当に素晴らしかった。その時、僕は祖国を思い、家族のことを考えていた。異国の地でみんながこうしてここに居るのも何かの縁、大学生代表団の「兄弟姉妹」たちに感謝した。

日付：12 月 4 日(火)　9 日目
大学名：北京大学
氏名：房謡

朝、群馬県を出発して新幹線に乗った。高層ビルの立ち並ぶ大都市とは違う車窓の景色に心が癒される思いがした。

昼ごろ、全日空に着いた。この世界に名だたる航空会社の魅力についてこの目で確かめることができた。

午後、高ぶる気持ちを抑えて「我が家」にような中国大使館を訪ねた。大使は出張で不在だったが、大使館職員から温かいもてなしを受けた。また、公使への表敬訪問では、今回の日本訪問の意義をあらためて認識することができ、大きな収穫となった。

次に早稲田大学を訪問し、夜には日本の若者と交流するチャンスに恵まれた。夕食会での交流は決して表面的なものではなく、私は日本の女子学生と中国の農民工について話し合った。交流によってお互いの理解を深めることができたが、中国と日本はもっと交流をしていく必要があると思った。そうした交流によってはじめて中日間の友情が確かなものになるのだから‥‥。

日付：12 月 4 日(火)　9 日目
大学名：北京工業大学
氏名：楊波

時間の経つのは本当に速い。アッという間に日本訪問の旅も終わりを告げようとしている。日本を離れるのが名残惜しく、何となく感傷的な気分になってきた。

全日空を見学して一番に感じたことは、中国もまだまだ研鑽の必要な分野があるということだった。また、メンテナンスセンターの複雑で先進的な構造や設計には目を奪われた。15 年前に日本がすでにこれほど緻密な建造物を建てることができていたことを考えると、中国もこの分野にもっと力を入れなければならないと思った。

午後、大使館に行ったが、たくさんのことを学ぶことができた。公使の話をほとんど速記のようなスピードでメモした。この急いで書きなぐった数ページのメモが、今後の勉強、仕事、生活にきっと役立つことになると思う。

その後、早稲田大学との懇親会があった。日本の大学生と様々な問題について議論しているうちに、すっかり友だちになった。両国の大学生が直面している就職の問題についても意見を交わし、お互いの状況についての理解を深めた。プレゼントの交換もあった。

早稲田大学の学生たちはコミュニケーション能力に長け、総合的な資質も高かった。こ

れは僕たちも見習わなければならないと思った。また、私立大学としてこれほどの規模にまで成長してきたは敬服に値すると思った。これは国の政策や国民の力によるものなのかもしれないが、企業の力も関係しているように思う。企業の社会に対する影響には、今回日本に来て学んだ企業理念や企業文化と合い通じるものがあるような気がした。

日付：12 月 4 日(火)　9 日目
大学名：北京郵電大学
氏名：張朝偉

最後の訪問先は全日空だった。企業精神のようなものについての話は聞けなかったが、ボーイング 747、767、777 の実物を見ることができた。概況紹介の重点をどこに置くかという問題だったかもしれないが、航空機のメンテナンスに関する知識や一般常識についての紹介が多かった。大いに視野を広げることができたが、この方面の知識に疎いために、全日空の技術レベルの高さと詳細な分業体制にただ感心するばかりだった。

早稲田大学との交流によって日本の友人ができたし、多くの中国人留学生にも会うことができた。今日会った日本人の中に中国に行ったことのある人がたくさんいたのが嬉しかった。

日本滞在中、和食の魅力を十分に味わうことができたが、中華料理への思いも拭い去れなかった。「北京ダック」、「京醤肉糸」(細切り肉の甘味噌炒め)、「小龍包」などがとても懐かしく感じられた。中国に行ったことのある日本人も中華料理は美味しいと褒めていた。

五千年の歴史を持つ中国には本当に数えきれないほどの伝統や文化があるが、中国ならではのものが徐々にその姿を消しつつある現実を見ると、中国はこのすばらしい伝統文化をもっと大事にするべきだと思った。日本の友人が「日本で食べる北京ダックは高いうえに、本場の味にかなわない」と言っているのを聞いた時は嬉しく思う反面、中国の美食はいつになったら世界を制覇できるのかということを思い、少し残念な気持ちにもなった。

日記の前のページをめくりながら、明日はいよいよ日本を離れるのだと思った。とても名残惜しい気持ちがすると同時に、心がふっと温かい気持ちに包まれるような感じを覚えた。本当にたくさんの人々にお世話になった。言葉では言い表せないほど感謝している。みんなの健勝と中日友好を祈ろう。

明日もう一度ホストファミリーの末長さんに会えればいいのだが‥‥。

12 月 4 日(火)　9 日目
大学名：南開大学
氏名：王坤芳

今日は得るものがたくさんあった。午後の公使の話は非常に示唆に富んだもので、いろいろと考えさせられた。重い責任を負わされている世代ではあるが、いろいろなことについて考えが不十分で、利己的で、歴史に対する責任感もはなから諦めてしまっているようなところがある。ますます複雑になっていく世界を前に、私たちはいったい何をすればいいのか‥‥。

ガイドの呂さんから北洋艦隊のエピソードについて聞かされた時には、深く反省させられた。1880 年代には、日本の識字率はすでに 100%に達していたが、中国はその頃いったい何をしていたのか。日清戦争では、清の戦艦は明らかに日本のものより勝っていたにもかかわらず、なぜあれほどまでにさんざんに打ちのめされてしまったのか。これらの疑問

に答えることは、今後の中国の発展にとって有用のように思われる

早稲田大学での交流会も時間が足りないほどだった。同じ年代なので、話題に窮することはなかった。会場は、一晩中熱気に包まれていた。この交流によって、たくさんの新しい情報を得ることができた。

中に一人三井住友に内定をもらっている学生がいたが、ここまで来るのに、数えきれないほどの難関があったという。9 回にも及ぶ面接にパスし、さらにいくつかの筆記試験に合格して初めて採用されるという。日本企業が最も重視しているのは、その人のコミュニケーション能力、人と協力する能力と会社への忠誠心だ。ただ、日本企業の特徴の一つであった終身雇用制度が揺らぎ始め、ほとんどの若者が若いうちの転職に抵抗を示さなくなってきている。

12 月 5 日(水)　10 日目

大学名：南開大学

氏名：趙陽

日本での最後の夜を過ごし、今朝目が覚めたのは 8 時で、一番遅い起床時間となった。午前中、急いで有名な秋葉原電気街に買物に出かけた。手持ちの日本円を全部はたいて SONY T200、F70 と iPod nano を購入し、日本での最後の用事を済ませた。昼は日中経済協会主催の送別会があり、今回の企業訪問の時に会った企業や大学の責任者やホストファミリーの方々と再会し、いろいろと話に花を咲かせた。

午後は成田空港に向かい、《走近日企　感受日本》訪問活動に終止符が打たれた。10 日間の訪問は日本を身近に感じる、掛け替えのない旅になった。たくさんの思い出をこれからゆっくり味わい、整理し、まとめて、そこからたくさんのことを学んでいきたいと思う。

中国の大学生を対象とした 5 年間の《走近日企　感受日本》活動が成功しますように！

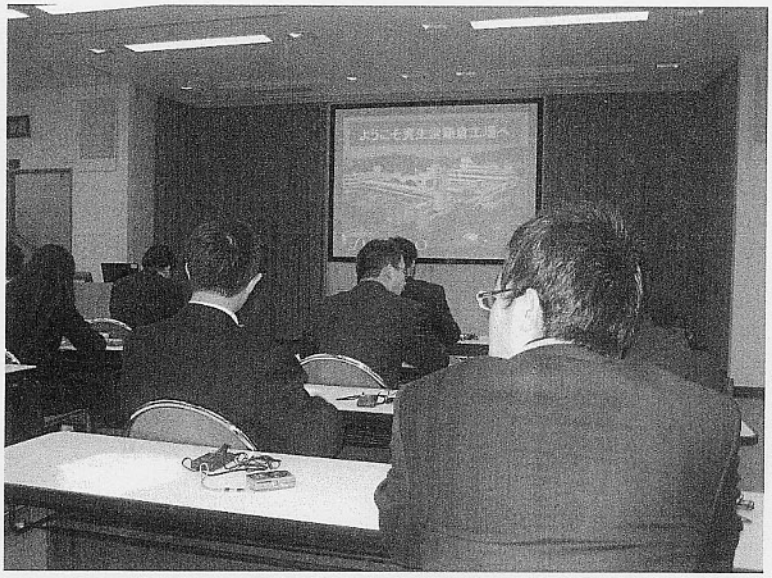
中日両国国民がより深くお互いを理解できるようになりますように！

中日両国の友好が子々孫々まで続きますように！

北京で開催された中国日本商会の壮行会　北川会長を囲んで一緒に

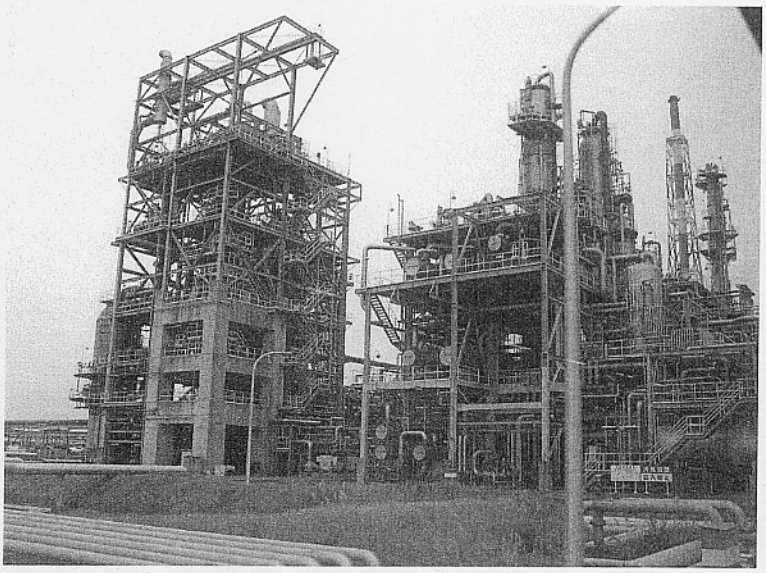
オムロン京都太陽の工場視察。身障者の方の労働環境が素晴らしい

トヨタ会館にてロボットの名演奏に聞き入る中国大学生訪日団　ちょうど見学に訪れていた小学生達と一緒にカメラに納まる



資生堂鎌倉工場で工場説明に熱心に耳を傾ける学生達

新日本石油精製根岸製油所
バスの中から広大な工場敷地を視察

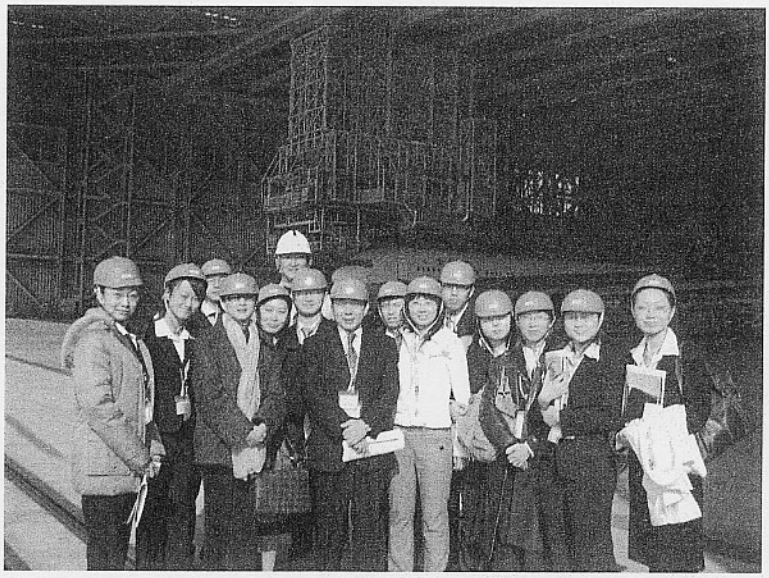


NEC の品川ブロードバンドソリューションセンターで明日のシステムに目を輝かせる

住友商事のレクチャーを終えて皆で記念撮影　この後 懇親会で商社の皆さんと交流

みずほコーポレート銀行のランチ懇談　この後にトレーディングルームを視察

野菜くらぶのトマト温室
ハウスの中は芳しいトマトの香りに溢れている



ANA の機体整備工場にて
ヘルメットを被っていざ現場へ
こんな角度から飛行機を見るのは初めての体験

早稲田大学でグループ討議
30 人の学生達は 10 のグループに分かれて早稲田の学生達と熱心に意見を交わす

孔鉉佑公使のお話を伺った後で
中国大使館の玄関で記念撮影
緊張の連続の毎日の中でしばし家に帰った気分

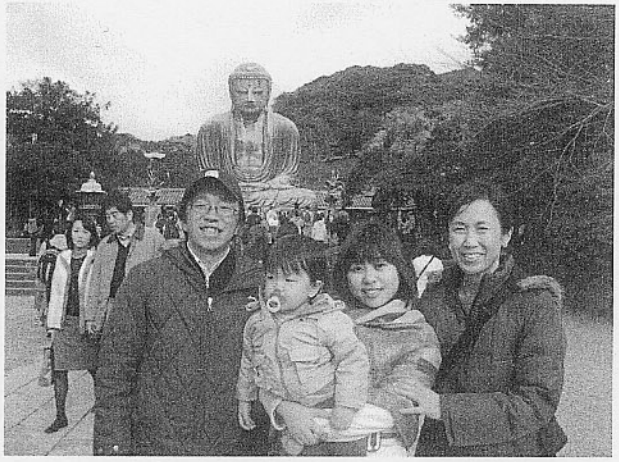
帰国日の歓送パーティ
日中経済協会の清川理事長と貿易研修センターの大慈弥専務理事を囲んで最後の記念撮影
学生達も日程を終えた安堵の表情

日中経済協会でホストファミリーの皆さんの引取りに来られるのを期待を込めて待つ緊張の一瞬

ホストファミリーのご家族と一緒に記念撮影　緊張は融けて笑みがこぼれる

ホストファミリーとお出掛け
子供達とも既に大の仲良しに

ホストファミリーとそのお友達を入れて皆で記念撮影



ホストファミリーご一家と鎌倉の大仏の見物　子供の重さも気になりません

高台寺で茶道の体験　初めてで興味津々

晩秋の清水寺　すすきと紅葉が綺麗です　しかし「人山人海」です

名古屋に向かう新幹線の中で
バスと違って皆と一緒に交流できるので楽しさも倍増

水上温泉で浴衣に着替えて記念撮影
会食の後のカラオケは盛り上がりました

ディズニーに身をおくとつい童心に返ってしまいます